
Knight Be Ambitious ～大志を抱いた騎士～

火の鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Knight Be Ambitious 〱大志を抱いた騎士〱

【Nコード】

N8995X

【作者名】

火の鳥

【あらすじ】

戦乱の終わり平和を享受する《フラウワ王国》
戦うことでしか存在の証明ができなかった騎士達。

国を、民を守るという意味を失い、

手柄を上げて出世するという望みも断たれた。

そんな中、平凡騎士のレオンハウトはひょんなことから真の騎士を目指すことになる。

愉快痛快騎士道爆進サクセスストーリー（予定）

プロローグ

ラ・アース大陸。

数々の国が生まれ、芽吹き、大輪の花となって咲き、実を落として、枯れ果て、種を残す。そこから、新たな国が生まれる。

無数の輪廻を繰り返し、常に100以上の小国が乱れ咲き、奪い合い、枯れ果てていった。

その中で、強く息づき生き残った国々があった。

その国の一つが、

《フラウワ王国》

建国七十年、数々の戦乱を生き抜いた、温暖な気候と豊かな自然に囲まれた国。

西に騎馬の国《ナイツ騎士国》。

左には少数精鋭の強い軍を持つ《ターガキン》。

そして、北には昇り龍の勢いで大陸に覇を唱えんとする、ラ・アース大陸二番目の大国。《フラウワ王国》と同じく、建国七十年にして《ワン》は大きな力を得ていた。

周りを侮りがたい強国に囲まれつつも、幸いなことに《フラウワ王国》は、この二十年の間戦乱に巻き込まれずにいた。

平和は初め、人々に喜びと希望を与えた。しかし、その平和ゆえに絶望に陥る者たちもあったのだ。

それは、、

騎士

王に忠誠を近い、国を、民を守るために剣を振るう。

しかし、戦乱なき時代、戦うべき敵もなく、手柄を上げる機会もなく、自らの価値を見いだせなくなりつつあった。

特に、戦争の経験のない若者にとって、騎士は国を守る勇敢な戦士ではなく、安定した賃金の保証のある仕事に過ぎなくなっていた。

かつて、優雅な中に礼節と勇気を併せ持ち、『花の騎士』と呼ばれた《フラウワ王国》の騎士達はその輝きを失ってしまったかのようにだった。

第1章 序章（前書き）

11月17日追加いたしました。

第1章 序章

戦場を駆ける白風。

疾風のごとく走る白馬に跨り、^{またが}白き鎧の騎士が駆ける。

太陽の紋章を描いた盾を左腕に。右手には、馬上槍。

緩やかな坂を一気に駆け下り、敵陣真つただ中に突撃する。

「――敵襲！ 敵襲だ！」

敵陣から上がる声。しかし、遅い。人馬一体となった白き騎士は、ようやく馬に乗り込んだ敵の騎士を馬上槍の一撃で撃ち落とす。その一撃で、槍の先端は折れる。元々そのように出来ているのだ。そうでなければ、引つかかった敵の体の重さで、自分が落馬してしまう。

白騎士に付き従うただ一人の従者。彼は騎士に並ぶと、馬上にて槍を騎士へ放る。騎士も先端の折れた槍を従者に放る。以心伝心、言葉もいらず完璧なタイミング。

白騎士は新たななる槍で、次なる獲物を狙う。正面から敵の騎士が怒声を上げて向かってきた。白騎士は馬の走力をそのまま力に変えた強力な突撃^{チャージ}を放つ。向かってくる敵の騎士は、その一撃を肩に受けて、回転しながら吹き飛んでいく。

白騎士は倒した敵を目で追うこともなく真つ直ぐ駆ける。狙うは敵陣の奥深く。高速で移り変わる景色を置き去りに、白き騎士は駆

けた。

そして、遂に目的のひととき大きな天幕を見つけた。そこには立派な鎧に身を包んだ黒騎士が槍を構えて待ち受けていた。敵将であることは間違いない。

「一騎打ちを申し込む！」

白騎士が敵将に槍を突きつける。すると、敵将は槍を掲げて応える。

「槍にかけては、ラ・アース大陸一の使い手である我に挑む気か！
よかるう。我が槍術、冥土の土産とするがよい！」

黒馬に乗った敵将が馬を駆る。白騎士も身を低くして駆ける。

互いの距離が近づく。

交差。

——ガキンッ

数十メートルも走り抜け、互いに馬首を返す2人の騎士。

白騎士の盾の表面に大きく傷が入っている。敵将の鎧の肩にも、浅い傷跡が残っていた。

再びにらみ合う二人の騎士。

どちらとも無く走り出した。

交錯する白と黒。

「——なんとっ！」

驚愕したのは敵将。鎧の脇に槍の先が突き刺さっていた。奇跡的に体まで達していなかったが、それは単なる幸運に過ぎない。

白騎士が従者から新たな槍を受け取る。再び白馬が風となる。慌てて敵将も黒馬を駆けさせる。

白騎士の構えが今までとは違う。極端な前傾姿勢。敵将の背に悪寒が走る。

「ええい、食らえいつ！」

敵将の放つ槍。狙いたがわず白騎士の顔へ吸い込まれていく。白騎士は敵将の槍の先から目を離さない。刹那の瞬間、白騎士はわずかに頭を傾けて敵将の槍をよけると、そのまま体を一本の槍のようにして、敵将に突きを放った。

——ドガッッッ！！

鈍い音と共に、弾けるように馬から後方へ吹き飛ぶ敵将。確認する必要もない。間違いなく絶命している。

白騎士は敵陣の奥で槍を突き上げた。

「フラウワ王国ソレイユ騎士団筆頭騎士、レオンハウト・フォレストー、敵将討ち取ったり！！」

歓声とどよめきに辺りが包まれる。

『フルール・シュヴァリエ！』

いつの間にかやってきていた味方の騎士達が、歓声を上げていた。

【真の騎士】よみがえフルール・シュヴァリエ
【甦りし花の騎士】

そう呼ばれるレオンは、仲間の歓声を受けて、ふと過去に思いを馳せた。

「はあ、仕事行きたくな」

俺が吐いた盛大なため息は、もはや漏らしたと呼べるレベルではない。

春の陽気が人々を活気づけ、通りを行き交う人々が忙しそうに働いている。俺から見ると、誰も彼もが楽しそうで、これから仕事に向かう俺は余計重苦しい気分になる。

気だるそうに歩く俺に、時々人々は視線を向ける。それは、俺が人が振り返るほどの美男子であるとか、注目されるような有名人だとか、そんな理由じゃない。

俺の着ている白い皮鎧の左肩についた太陽の印^{マーク}。この《フラウワ王国》の5つある騎士団のうちの1つ、ソレイユ騎士団の騎士たる証だ。

騎士と言っても、戦争のない平時は犯罪などを取り締まる警備隊の役割が強い。警備といったって、喧嘩の仲裁とか、貴族の護衛とかそんなもんで、ハラハラドキドキする場面など全然ないし、パトリールと称して二、三時間町をぶらつくだけだ。

ちなみに、俺はそもそも騎士になんてなりたくなかった。貧乏貴族の次男坊として生まれて、上には4才違いの優秀な兄。文武共に優れていた兄は家族からも周囲からも期待されていた。一方、俺は昔から悪知恵ばかり働いたずら小僧で、当然のことながらダメな方扱いされていた。

しかし、俺が11才のとき、騎士になるはずだった兄は、ある日突然神の御告おつげを受けて、芸術家になると言って家を飛び出してしまった。

困ったのは俺の両親だ。貴族は家名を残すことを一番に考えている。そこで両親は残った息子のダメな方。つまり俺に、『もうフオレスター家を継ぐのはお前しかない。どうかお前だけは騎士になつてくれ』と懇願した。初めて期待されるということを経験した俺は一念発起して、見事に一発で騎士の従者になる試験に受かった。

俺が騎士になったのは3年前。12歳から従者として勤め、15歳で正式に騎士に認められた。

俺も最初はやる気があったから、色々なアイディアを班長に提案したが、「それは昔やってダメだった」とか「もうアイディアはだし尽くされてる」とか「どうせ言っても上は現場の意見なんて聞いてくれない」とか言われて、揉み潰されてしまった。

うちの上司を含めてほとんどの騎士がやる気をなくしていたし、最後の戦争が終結して二十年余り。その後生まれた世代は、戦後の平和な時代に生まれ、戦争で手柄を上げる機会もなく、国や民を守ることで騎士としての誇りをもつという機会もない。

唯一手柄を上げる機会とすれば、年に1度の騎士大会ナイツ・オブ・シヴァリーである。馬上槍や、剣、弓の個人技の他に、集団戦もあり、優勝すれば賞金と名声を手に入れることができる。しかし、優勝しても出世への影響は大きくないらしく、結局要職につくのは有力貴族ばかりだった。

さらに最近、騎士達おれたちのやる気を削ぐ出来事があった。

前回の大会で、花形種目の馬上槍試合ジョストの優勝者に反則の疑いがかかった。噂によれば、規定のものとは違う軽量化した改造槍を使い、馬には興奮剤入り飼料を与えていたとのこと。

將軍と5つの騎士団の団長による首脳会議の場で、偶然その話題がでた。5つの騎士団の団長が許されざる行為だと憤いきどおる中、將軍は言った。

「負けた奴が何を言っても言い訳」

これには騎士団長達も呆れた。騎士の誇りもあつたもんじゃない。その話が広まると、一部の騎士は卑怯なことをしても勝てばいいのだと考えたし、その考えに馴染めぬものはやる気をなくした。なんだかんだ言つても、皆なけなしの誇りぐらいもっていたんだ。

そんなわけでこの国の騎士達は、訓練でいかに樂をするか、同じ時間働くなら、いかに手を抜いて、かつ残業せずに帰るか、考えるのはそれだけだ。

まあ、それでも俺は別に良かった。訓練で体を動かすのは嫌いじゃないし、初めて配属された上司は、アイディアを上伝に伝えるみたいな面倒なことは嫌がったが、人間性はよく、楽しく働くことができた。仕事が終われば同期の騎士や友人達と飲みに行き、休みの日には狩りや、乗馬を楽しんで適当に暮らせればよかったんだ。しかし、そううまくはいかなかった。

半年前に異動があつた。俺が今所属しているのは、《フラウワ王国》第2の都市ダリアの北部地区担当ソレイユ騎士団、四番隊の第九班。魔の第九班と呼んでもいいくらいだ。

九班は若い騎士が行くと1年も経たずにやめてしまうことが多い。その理由は、俺の上司でもある万年ヒラ騎士の超嫌な中年男のせいだ。

いつも遅刻ギリギリにやってきて、挨拶しても返事を返さない。小さなことでグチグチ言うが、やりたくないことは人に押し付ける。本当に嫌な奴なんだ。

まあ、そんなこんなで、話は長くなったが、俺はもう騎士なんてつまらなくなつたから、辞めたくなくなつたってことなんだ。

・・・あの人と会つまでは。

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章第1

12/1 ちょっとだけ修正しました

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章第2

読んでくださってありがとうございます。

今日も午後はパトロール。決められた道を3時間かけて練り歩く。そんな毎日の日課は犬の散歩みたいなものだ。最悪なのは、一緒に歩くのが犬じゃなくて、最悪の上司だつてことだ。

俺は本当にうんざりして、一言もしゃべらず黙々と歩く。半歩先を歩く万年ヒラ騎士のクォーンはいつも通りの仏頂面。

パトロールと言つたつて本当に形式みたいなもんで、この上司ときたらなるべく揉め事を避けようとするのだ。

先日も若者二人が言い争いをしている場面に出くわしたが、

「あれは仲間同士がふざけているだけ」

と言い捨て、さつさと通り過ぎようとした。そのとき、若者の一人が刃物を抜いたため、俺は慌てて止めに入り事なきを得たが、放つておいたらどうなつていたのか。その後、揉め事を解決して帰るときに、このクソ野郎クォーンはチツと舌打ちまでしやがったのだ。

そんなことを思い出して俺はイライラしつつ歩き、パトロールートの半分を回ったところで、トラブルは起きた。

狭い路地から言い争うような声が聞こえた。先に歩く無気力騎士クォーンは、路地を見ることもなく通り過ぎる。

まったくあいつは、仕事をする気があるのか！ とは言うものの、俺もまったくもってやる気をなくしているため、路地を通り過ぎる

ときチラツとだけ覗く。

言い争っていたのは3人の男と一人の女。いや、女の背には子供が隠れている。

「おい、何ボケツとしてるんだ。さっさと行くぞ」

ぶつくさ言うクオーンを無視して路地に飛び込む俺。

「恥を知らないさい」

女の凜とした声が響く。

「てめえにや関係ねえだろ！ それとも何か、あんたが俺たちの相手をしてくれんのか」

真ん中の大男が言うと、左右の男たちが下品な笑い声を上げる。

「——待て待て！」

俺は男達と女の間割り込んで男達に顔を向けた。男達はどうやら傭兵崩れらしく、山賊のような格好をした強面の連中だ。こんな奴らが道を歩いてきたら、俺なら視線を合わせないようにして、できれば道を変えるな。

「なんだてめえは！」

大男に怒鳴られ、思わず身をすくませる俺。しかし、ここで引き下がるわけにはいかない。俺はなけなしの勇気を振り絞る。

「騎士団の者だ」

俺は声が震えそうになるのをなんとかこらえて、左肩の騎士団の紋章^{マーク}を見せる。これで大抵の奴はおとなしくなる。しかし、傭兵たちは顔を見合わせると、

「それがどうした」

と平気な顔で言ってきた。いや、むしろ権力を振りかざそうとしたため、反発の空気すら感じる。

「あのな、ここでお前らみんなバラして、そのあとすぐ町を出ちまえば捕まらねえんだよ」

えっ！？ バラすって、、

俺は、比較的治安のいいダリアの街にこんな連中が居るなんて思っていたいなかった。

ニヤニヤ笑う傭兵たち。

俺は仕方なく、牽制のために腰の剣に手をかける。

「おっと待ちな！ そいつを抜いたら俺たちや本気でお前を殺すぜ」

真ん中に大男は真顔になってスツと目を細くした。傭兵たちも剣に手をかける。とてつもないプレッシャーが俺を襲う。

まさかこんなことになるとは。俺は何事も無く、嫌々仕事をして、休みの日に趣味を楽しんで、適当に生きられればそれでよかったの

に・・・

俺の胸には恐怖と後悔が行ったり来たり。その俺の様子を見て、傭兵は面白がり、脅かすように剣を少し抜き、シャリンと鳴らした。その音に、ビビりまくっていた俺はとっさに剣を抜いていた。普段真面目に取り組んでもいないのに、訓練の成果が出てしまったらしい。

驚いたのは傭兵たちも一緒だったらしい。

「てめえ、やるのか！」

傭兵達3人も剣を抜いて構える。

歴戦の傭兵相手に、しかも相手は3人もいるのだ。勝てる訳がない。

——マジデオワツタ

俺が人生の終焉を悟ったとき、甲高い音が響きわたる。

ピーーーーーー！！

「こっちだ！　こっちにいるぞ！」

クオーンの声。あんなでかい声が出せたとは、初めて知った。

俺がこの後に及んでそんなくだらしないことを考えていると、傭兵たちは慌てたように、

「ずらかるぞ！」

といって路地の奥に逃げた。

そこへ騎士の増援部隊が、クォーンを先頭にし、クォーンを最後尾に置いて、つまりはクォーン一人でやってきた。

「なにやってるんだ。バカが」

冷たく言って、パトロールルートに戻っていくクォーン。俺はしばし呆然としたあと、戦ってもいないのに荒くなった息を整えつつ剣を腰に戻す。

「ありがとうございます」

背後からかけられた優しい声に振り返る。

肩にかかる程度の緩やかなくせ毛。彫りが深く高い鼻。艶やかな長いまつげに、小さな唇。澄んだ青の瞳は南の海を思わせる。この女・・・いや、女性を見たとき、透き通るような白い肌というのは、こういうことを言うのかと初めて知った。

—— まちでタイプ！

目を見開いたまま硬直している俺を、その美しい女性は小首をかしげて見る。

・・・かわええ

俺の顔が一気に緩んだ。

「騎士様、大丈夫ですか？」

言われて俺はハッと表情を引き締める。

「もちろん大丈夫です！」

緊張する俺に、この女性は笑顔を見せて言った。

「さすが騎士様ですね。身を呈して私たちを守ってくださったお姿、本当に素敵でした」

素敵、今素敵って言った？ 俺は完全にハートを射抜かれましたよ。

「いえ、弱きを守ること、それが騎士の使命ですから。・・・それでは」

ぎこちない動きで、通りに戻ろうとする俺に、その美人は言った。

「騎士様、せめてお名前を教えてください」

騎士になったら一度は言われてみたいセリフのナンバー1に入りそうな言葉を背に受け、俺は顔だけ振り返ると、いい表情を作って言った。

「オンハウト・オレスー」

あれ、ちょっと噛んだかな？ しかし、言い直すこともできず俺

は小走りで通りへ戻った。

仕事が終わわり、すっかり暗くなつた夜道を帰路につく。

あのあと散々クォーンに文句を言われたが、このときばかりは全く気にならなかった。なぜかと言えば、頭の中は当然、あの美人のことでいっぱいだったからだ。

俺のバカッ！　なんで名前を聞かなかったんだ。せめて、名前と住所と、職業と、休みの日と、趣味と、将来子供は何人ほしいかぐらい聞いておくべきだったのに！！

「あ~~~~~！」

道の真ん中で頭を抱えて叫んだ俺を見て、近くを歩いていた男がギョと驚き、気味悪そうな顔をしながら足早に去って行った。構うもんか、男なんてどっか行つてしまえ。

悶々とそんなことを思い出していると、自分のセリフも思い出す。

『弱きを守るのが騎士の使命』

自分で言いながら馬鹿らしいと思う反面、何か胸の奥に疼くようなものがある。

しかし、それを打ち消すように俺は思った。俺なんかになんかそんなことできる訳がない。学もないし、武術の腕だつて人並み。勇気だつてない。

あの美人に名前を聞いておけばどうなったって言うんだ。出世の見込みもないこんな貧乏貴族の次男坊、あんな美人が相手にする訳がない。さっきまでの高揚感は嘘のように消え去り、鬱々とした気持ちで心を占めていく。

ふと見ると、街の中心にある公園が目飛び込んだ。こんな気持ちで家に帰る気にもなれず、なんとなく公園に入っていく。

公園の中心にある広場。

そこには一体の石像がある。ウェーブのかかった短い髪と、もみ上げから鼻の下、顎までつながるヒゲ。掘りの深い顔は美化されているとは言え凛々しい。

フラウワ王国建国の王、ジーニアス・ローバーン。

騎士から身を立て、一代で王になった。このダリアを王都とし、武術、兵法にすぐれ、また人としても魅力が溢れており、多くの人が彼に協力したと言われている。まさしく、英雄。

その石像の足元の台には、文字が刻まれている。

Knight Be Ambitious
騎士よ、大志を抱け

騎士から王になった彼らしい言葉だろう。だけど俺は、それを見た瞬間怒りがこみ上げてきた。

「なにが大志を抱けだよ！ 騎士としての誇りを感じる場面もない。

戦争もなくて手柄を上げる機会もない」

俺は石像の台座に手を付ける。

「手柄を上げる機会もなけりや、出世の機会もない！」

ドンツと手を叩きつける。

「どうやって大志を抱けてんだよ！」

いつの間にか涙が流れていた。才能もなけりや、金もない。勇気もない。希望もない。

「もう死にてえよ」

ポツリと呟く本音。

そうだ。俺はいつの頃からか、何かあると早く死んでしまいたいと思うようになっていた。どんなに普段明るく振舞っていても、何かあれば、もう面倒くさい。早く死にたい。そう思ってしまう。なぜ生まれてこなければいけなかったのか。そんなことを考えてしまふんだ。

『望みを叶えたいか』

聞かれれば俺はこう答える。

「叶えたい」

『望みを叶える方法があるなら行くと誓うか』

聞かれれば俺はこう答える。

「誓う」

『ならば望みを言え!』

「おれは・・・」

今日の出来事を思い出す。美女に言われた言葉。俺が言った言葉。

答えはたった一つ。

「————モテたい!!!」

心の奥からの叫び。

・
・
・

・
・

・

『バカもんがあ! そこは真の騎士になりたいじゃろうが!—!』

いきなり怒鳴られ、俺はびくんと身をすくませた。辺りを見回すが誰も居ない。

『こつちじゃ、こつち。上、上』

言われて顔を上げると、石像の顔が色づき、石像からにゅーっと、石像と同じ顔の男がせり出してきた。

俺が驚いて口をパクパクさせていると、

『お主は、真の騎士になりたくはないか？』

「え、あ、幽霊？ 真の騎士なんて、、俺は勇気もないし、実力だつて、、」

頭は混乱していたが、躊躇とまどいながら言つと、

『何、言いたいことはわかる。しかし、そんなことは大した問題ではない。大切なのはお主が真の騎士になることを望むかどうかじゃ』

と、その初老の男は苛立たしげな表情を浮かべた。

「でも、自信ないし」

そこまで言つたところで、初老の男は、切り札を使った。

『ええい、ウジウジしおつて！・・・知っておるか。真の騎士になつたらモテモテじゃぞ』

「なる！ 真の騎士になる！」

俺はすかさず言つた。初老の男はなぜか少し不満げな表情を浮かべたが、ひとつ頷き、

『うむ、ならばワシが道を照らそう。ワシのことは、ジーニアス卿と呼ぶがいい』

こうして、俺と幽霊の奇妙な共同生活が始まるのだった。

誤字脱字等ございましたらご指導お願い致します。

10 / 31 誤字修正いたしました。

12 / 1 微修正いたしました。

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章第2

毎度ありがとうございます！

幽霊騎士、ジーニアス卿に取り憑かれてから1週間。

真の騎士への道は過酷だった。

『もつと背筋を伸ばせ！ 騎士たるもの、威風堂々歩かねばならん』

『酒は控えろ！ 酒に溺れれば怠惰な生活に陥ることになる。その生活は精神も緩めることになるぞ！』

『騎士たるもの早起きは必須。朝の時間は夜の何倍もの価値がある。故に早く起きるがよい』

『本を読み。知識をつけよ。真の騎士たるもの、知性の輝きも持たねばならん』

『レオンよ。髪型、衣服、靴に至るまで気を配れ。民の模範となるべき騎士が、だらしない格好をするな！』

『まったくなつとらん！ 騎士たるもの、言葉遣いにも気をつけよ。自分のことは、ワタシ、もしくは、ワタクシと言え。俺などと粗野な言葉を使うな！』

『優しくあれ。真の騎士たるもの、慈悲の心を持たねばならん。優しさとは人が持つ宝ぞ』

と、まあ簡単に挙げただけでもこれくらいは小言を言われた訳です。一日に何度も説教をされた俺は、ついに1週間経った今日ブチ

切れてしまった。

「もう！ 無理無理無理！！ 真の騎士なんて俺には無理だ！」

『自分のことは『私』と言えと何度も言っ取るだろう』

俺がわめくと、ジーニアス卿はひどく冷静に言った。

「ワタシもワタクシも嫌なんだよワタクシはさ！ 俺って言いたい
の！ そもそも、1週間一緒にいて分かったでしょう！ 俺には真
の騎士なんて絶対無理！ なれないんだよ」

ジーニアス卿は、俺の言葉を最後まで聞いたあと、ポツリといっ
た。

『お主はすぐ物事を諦めようとするな。よし、今後一生、『諦める』
のを禁止する』

それは提案でも、助言でもなく、宣言だった。しかも、俺の意思
は無関係の宣言。

「『諦める』の禁止って、どういうことです？ それこそ無理でしょ
」

『ふむ、するべきことは簡単だ。『出来るまでやり続ければいい』
それだけじゃ』

はあ、この人おかしいんじゃないか？

「そんなことデキナイです」

『ふむ。『出来ない』も『諦める』と同じ意味だから禁止じゃ。今後は『自分にはできる』と言え』

「なんですかそれ？ 完全にただの精神論じゃないですか。全然現実的じゃないし」

すると、ジーニアス卿はあごひげを撫でながら、余裕の表情で返した。

『精神論で何が悪い。人間など精神で、あるいは魂で動いておる。現実的などという言葉に甘えて努力することを怠るな』

ガツンと言われ、俺は反論もできず渋い顔をする。

『最近の若い者は、目に見えるものばかりを追い求めるが、この世には目に見えぬものが沢山ある。空気も目に見えぬが存在するし、親の愛も見えぬが確かに存在するじゃろう？ もちろん、『幽霊』も存在するしのう。ハッハッハ！』

俺からすれば全然面白いところは無かったが、ジーニアス卿はうまいことを言ったかのように笑っている。

『レオンよ。ワシは1代で王になったのだ』

「それはあなたが特別だから・・・」

『それは違う！』

俺の言葉を遮ってジーニアス卿は語った。

『ワシは普通の人間じゃ。お主と変わらぬし、天から授かった才能などなかった。しかし、目の前のことを一生懸命全力で行い、自分の力を信じ、仲間たちが協力してくれたおかげで王になることが出来たのだ』

そう言ってジーニアス卿は過去に思いを馳^はせるように遠くを見つめた。

『ワシに出来ることはお前もできる』

「でも、俺本当に何の取り柄もないし、」

俺は正直に言った。これだけ言えばジーニアス卿も諦めてくれるだろうと思った。

『わかった。ならば仕方ない』

ジーニアス卿は一つ頷く。

『お主がなんでもできると言うことを証明しようではないか。その引き出しから紙を出せ』

俺は言われるままに、机に付いているたった一つの引き出しを開ける。そこには騎士団からの通達がグシャグシャと入っていた。

『きたないのう。騎士たるもの、整理整頓は必須じゃぞ。さあ、その一番上の紙をテーブルに広げるんじゃ』

机の上に一枚の紙を広げる。

【聖都ダリア 騎士大会】

ナイツ・オブ・シヴァリー

三ヶ月後に開かれる大会である。馬上槍、剣闘、弓などの戦いがあり、もちろん大会の花形を務めるのは馬上槍試合のトーナメントだ。

ダリアに在中する約五百人の騎士のうち、大体百人程度が参加する。

腕に覚えのあるもの、上司に無理やり参加させられる若い騎士など様々だが、三日に及ぶ大会は非常に盛り上がり、街はお祭り騒ぎとなる。

俺はものすごく嫌な予感を感じていた。しかも、ビンビン感じていた。

「それで・・・これがなにか？」

ジーニアス卿は閉じていた目をクワツと開けて一言。

『優勝せよ！ 馬上槍で』

「ムリ」

俺はもちろん即答した。

『ふっふっふっ、『諦める』のは禁止だ。なに、ワシが手を貸せば優勝など容易いわ』

「いやいや、本当に無理ですって。一度出たことありましたけど、2回戦で簡単に敗退しましたから」

そうなんだ。俺は騎士2年目のとき、乗馬には自信があったので馬上槍ジョストの試合に出てみたのだ。一回戦は余裕で突破し、これはいいところまで行けるのだと思ったが、2回戦で簡単に敗退。えらい恥ずかしい思いをした。それ以来この大会は見物客としてのみ参加している。

『のうレオンよ。一度だけ、ワシを信じてみないか。前にダメだったのはワシが付いていなかったからじゃ。ワシはお主ならできると信じておる』

信じるなんて、人から言われたのは初めてかもしれない。ずっといたずら坊主として育ってきた俺は、叱られることはあっても期待されることはなかった。

俺は少し心臓がドキドキし始めていた。かりにもジーニアス卿は騎士から王になった男で、数々の武勇伝を残しているのだ。そのジーニアス卿が力を貸してくればもしかしたら、本当に、優勝・・・出来るかもしれない。

しかし、同時に懸念もあった。人前で負けるのは恥ずかしい。馬鹿にされ続けるんじゃないかと不安だった。

『まだ迷っておるのか。仕方ないの。これだけは使いたくなかったんじゃが・・・』

ジーニアス卿は、眉間にシワを寄せると、気を取り直して俺に切り札を使った。

『レオンよ。馬上槍ジョーストのトーナメントで優勝したら、どうしようもないほどモテるぞい』

「——レオンハウト・フォレスター。その任務、謹んで受けいたします！」

俺は片膝をついて、王に捧げる完璧な礼をしてみた。

モテる、、、いや、真の騎士になるため、俺の目標を定まった。

誤字脱字等ございましたら、ご指摘願えれば幸いです。

10/30ご指摘いただきました誤字訂正いたしました。
ありがとうございます。

12/1微修正

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章第四

いつもありがとうございます。

あゝ眠い。

午前の訓練の時間まで1時間はある。俺はすでに登城し、8時から訓練の始まる乗馬場に、早乗りしていた。

なぜこんなに早く登城したのかというと、もちろん起こされたからです。ええ、早起きの老人に。正確には老人の幽霊にね。ジーニアス卿は幽霊にもかかわらず朝に非常に強い（老人だからか？）

朝も気持ちよく寝ているとやかましく起こされ、朝食をしつかり食べるだの、騎士は清潔感が大切と、念入りに身支度をさせられる。今までは、家を出る30分前に起きて、寝癖のまま駆け出す毎日だった訳だが、いまでは1時間以上も前に起こされるため、眠くてしょうがない。今日なんて早朝練習をするぞと言われ、日の出くらいの時間に起こされた。

俺たち騎士の生活に付いて話すと、仕事は5日行って1日休みだ。フラウワ王国は規則がゆるい。朝は8時から仕事が始まるため、その時間までに現地に集合して点呼を受ければ良いということになっている。

現地と言うのは、ローテーションでやる事が決まっているため、その日の担当の場所に行けばよいということだ。

例えば、午前がパトロールなら詰所よせどに直接出勤すればいいし、朝が学科なら講義室に直接行けばよい。俺は午前は乗馬の訓練だから、朝の自主練習のあと、そのまま乗馬の訓練を受ければいいわけだ。

ちなみに、さつきから使っている登城という言葉から分かっているかもしれないが、この聖都ダリアの中心よりやや北に、ローバーン城という城がある。昔ジーニアス卿が住んでいた城だ。元々は王都だったわけだから、城があるのは当たり前なわけだが。その城の周りに、乗馬場や、剣闘などの訓練所、兵舎一（住み込みの騎士用）、食堂などが設置されている。パトロールの場合は、ダリア内の各区域にある詰所に出勤する。

厳しい国や、部隊だと、現地集合はありえない。まず、所定の場所に班単位、あるいは小隊単位で集まり、朝礼や騎士の心得などを暗唱し、それから各所に向かうなんていうのも珍しくない。

まあ、ともかくそんなわけで、ゆるゆるの国の騎士である俺は眠いわけだ。

しかし、せっかく早起したんだから、練習くらいしなないと損だ。俺は馬小屋にいったとつと馬を借りることにした。

馬小屋の入口には受付があり、ここで申し出て馬を借りる。管理しているのは老いた騎士ということになっているが、実際にはダリアのすぐ北の丘にある牧場から派遣された者が管理をしている。

馬小屋の奥で、青いオーバーオールに白いシャツ姿の少年が作業をしている。忙しそうで申し訳なかったが、とりあえず声をかけることにした。

「・・・馬を1頭借りたいんだけど」

少年は背後から突然声をかけられ、跳び上がって驚く。クセのあ

る金髪にそばかす顔の、あどけなさの残る少年。

「あ、はい騎士様。・・・お早いですね」

確かに、他の騎士は一人も来ていない。

「あゝ、ちよつと早く目が覚めてね」

なぜか言い訳してしまう俺。大会に出るから練習するんだなんて恥ずかしくて言えない。少年が馬を出すために奥へ向かうと、ジーニアス卿がニユッと現れ、手近な柵に腰掛ける。

『レオンよ。名前も呼ばず頼み事だけするとは、無礼ではないか。あと、笑顔が出ておらんぞ。真の騎士たるもの、守るべき民に優しくあらねばならんぞ』

朝もはよから笑顔なんてだせるかつ！ 日の出と共に起こされてんだぞ、こっちは。しかも、あの少年の名前なんて知らないし。

そんなことを考えていると、一頭の栗毛の馬の轡くつわを引いて少年が戻ってきた。ジーニアス卿にジロリと睨まれ、俺は仕方なく聞いた。

「あゝ、少年、君の名はなんて言っただかな？」

「えっ、あ、僕はトーマスですけど・・・僕、何か失礼なことしちゃいましたか？」

突然の質問に不安そうな顔をするトーマス少年。

俺は慌てて笑顔を作ると、

「いや、名前も知らず頼み事をしたから失礼かと思ったんだ。オレ・
・いや、ワタシはレオンハウトだ。トーマス、忙しいところを悪いが、馬を1頭頼めるかな？」

わざとらしくくらい丁寧に言う俺。しかも、馬もつ連れて来てるし、俺動揺しすぎだし本当に。

トーマス少年は、ポカーンとした顔で俺のことを見ていたが、みるみるうちに顔がパーっと明るくなり、

「はい、レオンハウト様！　すぐに鞍の用意もしてまいります！」

と元気よく受け付けの奥に走っていった。俺は少年の変化を不思議に思った。

「ジーニ阿斯卿、トーマスくんはなんであんなに嬉しそうなんですかね？」

俺が聞くとジーニ阿斯卿は顔をしかめて、

『言葉使いがなっぺおらんな・・まあいい。いいかレオンよ。人は誰でも己を名前で呼んでもらえると嬉しいものなんじゃよ。『馬係』とよばれるより、『トーマス』と呼ばれる方が嬉しいということじゃな。その時点でひとりの人間として認められたように感じるんじゃ』

そんなもんかなと思ったが、そのときは深く考えなかった。

やがて、トーマス少年が嬉しそうに鞍を持って駆けてきた。

あゝ、朝練面倒だなあ。

広い乗馬場の一角に、馬上槍の練習場は設けられていた。

規定の位置からスタートし、騎士に見立てた巻き藁ワラに向かって槍を繰り出す。かなりのスピードで走り、幅50〜60センチほどの巻き藁に槍を当てるのは意外に難しい。

俺は何度目か、馬を全力で走らせると、数秒で目前に迫る巻き藁めがけて槍を繰り出す。槍は巻き藁に命中すると、その表面を滑って後方へ抜ける。

よっし、いい感じだ。

もう一本行こうと馬を方向転換させる。すると、ジーニアス卿が現れる。

『レオンよ。お主は今なんの練習をしておる？』

「馬上槍ですが？」

『ふむ、馬上槍の『何の練習』をしておるんだ？』

はあ、面倒くさい。

「ジーニアス卿、槍の練習に決まっています。槍の、あるいは槍を当てる練習です」

おれはやや語尾を強めて言った。

『なるほどな。わかりやすいご説明ありがとう。しかし、ワシが聞いている意味とはちと違う。ワシが聞いているのは、馬上槍の『実戦』の練習なのか、『試合』の練習なのかと聞いておるのだ』

あーもー！ イラつくなあ！

「ジーニアス卿、馬上槍の練習は馬上槍の練習です！ 『実戦』も『試合』も一緒でしょう！」

俺が怒り気味に言うが、ジーニアス卿にはどこ吹く風といった感じだ。

『レオンよ。実戦では、馬上槍は人を殺すことが目的だが、試合では違うのではないか。試合は何を目的にしておる？』

言われて考える。試合の目的？

「勝つことです。ポイントをとって・・・」

『うむ。そうじゃな。つまりはルールがある。では、そのルールはどんなものじゃ？』

「はい、一試合につき三回、騎馬にて指定の槍を使い相手を攻撃します。槍の穂先が相手に当たって壊れれば1ポイントで、首から上に当たり、なおかつ穂先が碎ければ2ポイントです」

試合用の槍の穂先は丸い陶器で出来ており、当たれば簡単に割れ

る。これは当たりの判定がわかり易いようにという意味で作られたものだ。

「つまりジーニアス卿はポイントを効率良く取って勝利する方法を練習しろと？」

そんな方法があるなら聞いてみたいもんだと思ったが、ジーニアス卿の言葉は予想を超えていた。

『それはルールに則って普通に考えた場合じゃろ？ 普通のことをするなら、練習量が多く、経験豊富な者には勝てんよ。勝つ方法はポイントを取るだけではなからう』

ジーニアス卿の言葉に、俺はもう一度馬上槍のルールを思い出す。

馬上槍の試合では、気絶した場合は即失格であり、それ以外には、相手の馬に故意に攻撃を当てた場合と、落馬をした場合は失格である。

落馬については、安全のためにヒモがついており、体勢が崩れても実際に落馬はしない。つまりは、普通なら落馬と判断されるような体勢の崩れがあれば、負けと判定されるということだ。

「つまり・・・気絶させるということですか？」

『ちがう。気絶するかどうかは相手次第になってしまっし、そもそも気絶させるのは難しいじゃろっ』

確かに俺は頷く。さっきも言ったが、試合用の馬上槍は先端に陶器を付けている。陶器故に簡単に割るため、よしんば顔に当たっ

たとしても、面当ての上から気絶させるほどの威力が出ることはほとんどないだろう。

というに残るは・・・

「落馬を狙うということですか？」

俺の疑問にジーニアス卿はニヤリと笑う。だが、俺は思った。落馬の方がよっぽど難しい。相手も槍がぶつかる覚悟くらいしているから、普通にあたったくらいじゃとても落馬なんてしない。落馬や気絶で敗北する者なんて、100人のうち、1人が2人くらいだろう。どう考えても無理だ。相手を狙って落馬させる方法があるなら、みんなやってるはずだ。

『お主、また無理だと思っただろう。すぐに諦めるのはよせとっておるだろうが。何、ワシがその方法を教えてやる。大船に乗ったつもりでいるが良い』

俺はそれでも、半信半疑でいたが、ジーニアス卿の話聞き驚いた。確かに、この方法なら落馬を狙えるかもしれない。それは、ルールに則った上で全く新しい、あるいはジーニアス卿ならではの戦略といえた。

俺はその戦略のおかげで、その後の練習に身が入った。

Knight Be Ambitious

大志を抱いた騎士

第1章第四

早く戦闘シーンが書きたい・・・

12 / 1 微修正

ジーニアス卿のシゴキ・・・特別訓練は続き、1ヶ月がたった。

早朝練習では、巻藁まきわらを突く練習をし、休日には、ジーニアス卿の、『乗馬場を逆走しろ』という恐ろしいアドバイス（命令）に従った。もちろん、普通なら逆走なんて危険だし許されない。しかし、乗馬場の管理人に何とかお願いをして、乗馬コースの一番外側を走ることと、皆に迷惑をかけないことという条件で許可をもらった。

逆走中も、ジーニアス卿は幽霊馬に乗って現れ、並走しながら助言をくれる。ジーニアス卿曰く、

『正面から来る馬が速ければこちらはスピードをゆるめ、向かいから来る馬が遅ければ、スピードを速くするんじゃない』

とのこと、言われて実行しようとしてみたが、相手の馬のスピードが速いか遅いかを正面から見分けるのは意外と難しい。と言っても、一ヶ月もやってればさすがにわかるようになってくる。この練習が何の役に立つのかはさっぱりわからないんだけどな。

その後も、剣闘の訓練の時間に、盾で相手に体当たりしろと言われ、近接武器の練習にもかかわらず、盾で体当たりを繰り返す間抜けぶり。仲間の騎士には、「レオンがおかしくなった」とか「猪武者」など、からかわれることになった。盾での体当たりはお互いの体に物凄い衝撃が走り、訓練の翌日はものすごい筋肉痛になった。特に、2メートルを超える巨漢の騎士相手にも盾で突撃させられ、何度も吹き飛ばされた日には、体当たりより受身の方がうまくなる

勢いだった。

まあ、そんな苦行の末一ヶ月がたった訳だが、午前の乗馬の訓練で馬上槍の試合をやることになった。2ヶ月後の大会に触発されて出場するものもしないものも、やってみようと言っことになったのだ。

俺はワクワクしていた。この一ヶ月の訓練の成果が試される日が来たのだ。俺は意気揚々と準備をし、順番を待った。俺は一番最後だったので、一時間以上も待った。ついに俺の出番が来た。ついに俺の伝説の幕開けとなる日が来たのだ。

相手は日頃から、大会に出場すると言っていた同期の騎士である。あんまり仲良くないから詳しくは知らないけど、まえの大会でもそこそこ勝ち残ったらしい。

右手に持った槍の石突き部分を肩から下げた三角巾に引っ掛ける。こうすることで2メートル半ある槍を片手で保持することが出来るのだ。左手の籠手には胸を隠せるほどの盾が付いている。ぶつかる瞬間、盾で体を守るためだ。それ以外の時左手は、馬の轡たすなをとっている。

相手との距離は数百メートル。真ん中の審判が旗を振れば、それはじまりの合図。

俺は兜の面あてをおろす。視界は一気に狭くなる。

——ドクンッ ドクンッ

やばい、緊張してきた。思ったより視野が狭い。なんかすごく見

づらい。ええと、どうすればいいんだっけ？ 相手のスピードにあわせて、槍を突くときは・・・

そのとき、視界の先でバツと旗が振るわれた。

「行け！」

周りにいた騎士が叫ぶ。

反射的に、馬を走らせる俺。相手との距離が急速に縮まって行く。もう無我夢中になっていた。全力で馬を走らせる。相手が数メートルの距離まで近づく。胸に衝撃が走る。駆け抜ける。馬は急停止はさせない。情性で走らせスピードを緩める。

そして、出発したのと反対側で動きを止めた。

「おい、大丈夫か？」

補助のために控えていた騎士が声をかけてくる。穂先が砕けていた場合、交換するために手伝ってくれるのだ。実際の試合では、騎士見習いの従者がする仕事だが、今回は訓練のため、ここに従者はいない。

「ああ、大丈夫だ」

俺はなんとか声を絞り出す。

「そうか、ならいいが・・・ところで、盾ぐらい使えよ。それから、槍も持ってたから当たらないにしても突いた方がいいぞ」

その騎士の言葉に、周りの騎士が大笑いする。

どうやら俺は、槍も振るわず、盾で守りもしなかったようだ。羞恥で顔が真っ赤になる。面あてのおかげで皆に顔を見られて居ないのが救いだ。

攻撃は全部で3回。俺は馬首を返して遠くにかすむ相手を見る。さつきよりは緊張は取れている。今度こそ、絶対に落馬させてやる！俺は闘志を燃やして開始の合図を待つ。

白い旗が翻る。^{ひるがえ}

弾けるように走り出す。全速前進！見る間に距離が縮まる。今度は盾で胴を守る。相手の槍が盾の正面を叩く。衝撃。遅れて俺も突くが、その一撃は空を掻く^か。

騎士達の待つ位置へと戻る。

「惜しかったな」「ドンマイ」「もう一回あるぞ」

あまりに無様だったせいか、周りの騎士が口々に慰めの声をかけてくる。

なんで、どうしてだ。練習したのに・・・

頭が混乱していた。ありえない。なんでだ。

そうこうしている間に、再び開始の合図の白い旗が振るわれた。

・・・やっぱり無理だったんだ。諦め。慣れ親しんだ感覚。

本気で走らせることをしないため、馬はスピードを落とし気味だ。相手が近づく。俺の盾に衝撃。俺は槍を突き出す。しかし、手応えは無かった。

騎士達の待つ待機地点に戻る。

騎士達は馬鹿にする声も上げず、俺の装備を外す手伝いをしてくれた。

気を使ったのか、周りには誰も居なくなつた。片付けをして訓練は終わりらしい。

「・・・ちくしょう」

俺は不覚にも涙が出ていた。あんなに練習したのに。まるで意味なんて無かった。バカバカしい！ やっぱ、俺には馬上槍の大会で優勝なんて無理だし、才能のない奴は何やつたって無駄なんだ。

『まったくなつとらんかったのう』

突然現れたジーニアス卿が、傷ついてる俺に追い打ちをかけてきた。

「見ればわかるでしょう！ どうにもならなかった。無駄でした。かすりもしなかった。この一ヶ月間無駄な練習をさせられたんですよ！」

俺は怒りのままにわめきちらした。ジーニアス卿は何も言わずじ

つと俺を見ていた。

『わしの指示をきちんと実行出来ていたと言えるかね？ 相手に合わせてスピードを合わせたかね？』

「それは・・・できなかったですけど」

『レオン。いま無駄だったと、かすりもしなかったと言ったな。槍を見てみよ』

槍？ 言われて地面に落とした槍を見てみた。何も変わったところは内容に思える。

『穂先をよく見てみよ』

——！ 陶器で出来た穂先がほんの少しだけ欠けて中の空洞が見えていた。

『最後の一撃は当たっていたんじゃないよ。タイミングが遅く、かすめるくらいじゃったがな。最後の時だけは、お主は諦めてスピードを緩めていたじやろう。そのおかげで、タイミングがあっていたんじゃない』

「タイミング？」

『そうじゃ。ワシは乗馬場を逆走するとき、相手の馬に合わせて速度を変えろと言ったろう。それは、すれ違う時の速度を常に一定にするためだったんじゃない。すれ違う速度がいつも一定なら、槍を当てるのははるかに狙いやすくなる』

ジーニアス卿に言われたが、無様に敗北したばかりで素直に話を聞くことなんかできない。

俺は返事もせず無言のまま、乗馬場を後にした。

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章第五

読んでいただき、ありがとうございます！

誤字脱字、ご忠告、なんでも素直に受け止めるつもりでいます。

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章第1

駆け抜けるがごとく書け抜けたと思います。かける限り。

午後のパトロールも終わり、ダリアの街には夜の帷が訪れていた。

俺は一人、悶々と考えていた。

本当に馬上槍の試合、勝てるようになるんだろうか。午前中の馬上槍の模擬戦での無様な敗北。最後の一撃は相手にかすっていたと言われたが、だからなんだってんだ！　そもそも、俺は馬上槍の試合に出たいとも思っていないし、優勝したいとも思っていない。それをジーニアス卿にやれと言われて、嫌々練習しているだけなんだ。

この1ヶ月間は本当に忙しかった。いつも夜は遅くまで一人チェスをしたり、ゴロゴロしながらだらしく過ごしていたし、休みの日は、釣りや狩りに出掛け遊び歩き、都合があれば、いつも仲間と飲みに行っていた。気楽で楽しかった。

しかし、最近は朝が早いため、夕食後はすぐに寝ていたし、休みの日はもっぱら乗馬の訓練をしていたため、遊びにも行っていない。まったく、つまらない毎日だ。

・

・

・

本当にそうだったか？

本当につまらない毎日だっただろうか。

巻藁まきわらに槍が当たった時は嬉しかった。

朝早い時間に一人馬を走らせるのは気持ちよかった。

休日に乗馬場を逆走するのは・・・恥ずかしかったが、相手と速度を合わせるのはうまくなってきた気がしたし、うまくなってる実感もあった。

そうか、だから今日試合に負けたことが悔しかったのか！

今までは、気楽なことを楽しいことだと思ってた。酒を飲んで騒いだり、娯楽として狩りをしたり乗馬をしたり。でも、毎日なんかに退屈で、変わりたいけど、大貴族でもなくて、才能もなくて、ただの悪ガキにすぎない自分なんか、そんなチャンスも実力もないって諦めてた。本当は心の中で何かが燻くすぶっていて、全力を出せるものを探していたのかもしれない。馬上槍の練習は、楽しいまではいいけど、毎日やるべきことをやってるって気がしたんだ。

そう、変わるんじゃないかって期待してしまったのかもしれない。

でも、現実はあるんかないって突きつけられてしまった気がするんだ。

「ジーニアス卿。いますか？」

歩きながら呼び掛けると、すうつと横にジーニアス卿が現れた。茶色の帽子に、茶色のコート、中は白いシャツとベストで品良くま

とめている。

『どうした？』

ジーニアス卿はまっすぐ前を向き、こちらを見ることもない。

「大会、勝てるわけないと思います。恥もかきたくないです。練習も辛いし。今日のこともやっぱ1ヶ月の努力なんて意味なかったと思うんです」

・・・

しばしの沈黙の後、ジーニアス卿の答えは期待していたものとは違った。

『そうか、それでは仕方がないのう』

ジーニアス卿は感情を感じさせない口調で言った。

「でも・・・今までの人生で、この1ヶ月ほど本気で何かやったこと無かったと思うんですよ。少しだけ、感じたんです。充実感て奴を」

俺はジーニアス卿の顔をちらっと見たが、ジーニアス卿はやはり前を向いたままだった。

「あと2ヶ月あれば、強くなれますか？ 恥をかかないくらいに」

沈黙を守っていたジーニアス卿が答える。

『わからん！』

「ええっ!？」

ここでわからんて言う？ どう考えても言わないだろ！

『レオンよ。お主は本心を話してくれた。だからワシももう嘘はつくまい』

そういうとジーニアス卿は立ち止まり、俺の目を見ていった。

『あと2ヶ月で、お主が優勝できるようになるかは正直わからん。ワシも神ならぬ身でな。しかしじゃ、『やらねば』優勝できる可能性はゼロじゃ。『やる』なら、優勝できるか否かはわからぬが、今より強くなれることは間違いない』

そこまで言って、ジーニアス卿は道を示す。

『昨日までの弱い自分にいるか、明日からの強い自分になるか、今日選ぶが良い』

こんな言い方されたら、答えなんて決まってる。

「まだ迷ってるし、自信もないですけど、『強い自分』を選びたいです」

『レオンよ、良く言った！ 今はそれで十分じゃ』

言ってジーニアス卿は笑う。

俺の顔にも、笑顔が戻ってきたみたいだ。

本心を話してテンションの上だった俺に、ジーニアス卿はある提案をしてきた。それは・・・

『レオンよ。女神フラウに祈願しに行こうぞ！フラウは幸運の女神とも言われておるし、戦の神アルファードの妻でもある。馬上槍の大会での優勝祈願にはもってこいの神じゃ』

言われた俺は神頼みも悪くないと、早速神殿に向かった。神殿は、家とローバーン城との中間にあり、少し寄り道すれば寄って行ける程度の距離だ。

神殿に着くと、1つ失念していた事に気づいた。夜は基本的に閉まっているのだ。フラウ信者がつとめる 門番に、閉館しているのでお通しできませんと丁重に断られた。

しかし、せつかくここまで来たんだし、何より、これから本気を出そうという誓いの日としては、思い立ったが吉日。今日がいいんだ！俺のただのわがままだが。

「いや、そこを何とか通してくんないか——」

『ごほんっ！レオンよ。笑顔と言葉遣い』

ジーニアス卿にご指摘いただく。

「ええと、貴公の仕事の都合もわかるのだが、ワタシもどうしても本日中に祈願せねばならぬ訳があるのだ」

どんな訳があるんだよと自分に突っ込みを入れつつ必死で理由を
探す。まったく思い付かない。もう、正直に言ってみるしかないか。

「ワタシは騎士なのだが、二ヶ月後、きたる馬上槍の試合に出場す
ることになり、何としても戦神の妻であり、幸運の女神であるフラ
ウ様のご加護を頂きたいと馳せ参じたわけであり・・・」

果たしてこの言葉遣いは正しいのだろうか？

「えっ騎士様、馬上槍の大会にお出になるんですか！？いやあ、私
は馬上槍の試合には目がなくて。是非ともがんばって頂きたいなあ
！」

門番は目を輝かせて言った。これは通してもらえるかなと思った
が、やっぱりダメらしい。まあ、これで通したら門番として意味な
いしな。

だがしかし、奇跡は起きたのだ。それも、人生最大の奇跡がつ！
！！

Knight Be Ambitious

大志を抱いた騎士

第1章第1

貴重な時間で私の小説を読んでもいただきましてありがとうございます。

ご指摘お待ちしております。

家のPCのネットがつながらず、更新遅れました。

どんどん更新します！

「その方をお通ししてください」

神殿の中からの声がした。門番のお兄さんはハッと振り返る。

「フローラ様!? は、はい、かしこまりました。騎士様、どうぞ中へ」

「えっ。ああ、ありがとう」

俺は突然すぎて戸惑ったが、門番に礼を言っ
て神殿の中にお邪魔する。すると、中で待っていたのは・・・

忘れもしない。南海の海を思わせる青い瞳。その目を縁取る長い
睫毛まつげ高い鼻に小さな唇。透き通るような白い肌。

「あの時のっ!」

俺は大声を出してから、指まで差してしまった。

「その節はお世話になりました」

そういつて、超絶美女は丁寧に頭を下げた。その所作の綺麗なこ
とと言っ
たらない。

「いえ、あの、お助け頂いてありがとうございます!」

俺はガチガチに緊張して言っ
たが、美女は目を丸くすると、花咲

くような笑顔で言った。

「それはこちらのセリフです。あの時助けて頂いて、お礼をしたかったのですが。お名前が、その、良く聞こえなかったので、探すこともできなかったんです。お会いできて良かったです」

確かに、名前を名乗ったときに噛んだ気がしたな。ああしかし、なんていう素敵な笑顔。彼女にまた会えるなんて、俺は最高に幸せだ。天にも昇る気分とはこういうことか！

「フラウ様のご神像はこちらです。どうぞ」

美女に案内され、俺は神殿の奥へ向かう。

「あの、騎士様。改めてお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

道すがら美女に聞かれて、俺は今度こそ、噛まないように慎重に答える。

「レオンハウト・フォレスターです」

うむ、バツチリの滑舌だ。

「レオンハウト様ですね。私はフローレ・・・フローラと申します」

フローラさんかぁ。なんてステキな名前なんだ。まあ、門番が呼んでたから気づいてたけど。とにかく、今すぐ結婚してほしい！なぜって？ タイプだからさー！！

「レオンでけっこうですよ。フ、フ、フローラさん！」

名前を呼んだぞ！ 俺は、フローラさんの名前を呼んだぞ！
心の中で拍手が沸き起こる。ああ、みんなありがとう。俺、彼女を
幸せにします！ 俺が心の中で勝手に盛り上がっていると、フロー
ラさんと目が合った。

「——レオン様は馬上槍の大会に出場されるんですね」

はう、さっきの門番との会話を聞かれていたらしい。もちろんノ
ーとは言えない。それどころか俺の口は勝手に・・・

「そうなんですよ！ 馬上槍の大会で優勝するために、幸運の女神
フラウ様のご加護をいただきに来たんですよ！」

ああ、俺のバカ&見栄っ張り！ 完全に優勝って言っちゃたよ！
これで負けたら本当に恥ずかしい。一回戦負けでもしてこの人に
幻滅されたら、俺生きていけない。
フローラ

「優勝なんて、すごい目標ですね。でも、強い騎士の方は沢山いら
っしゃるんですね。不安になったりしませんか？」

「ええ、不安も正直あります。しかしですね、やらなければ優勝の
可能性はゼロですから！」

ジーニアス卿の『それはワシがさっき言った言葉じゃろうが！』
という声が聞こえたような聞こえないような。しかし俺は、そんな
幻聴は全く無視した。

「前向きなんですネ。『やらなければ可能性はゼロである』騎士王
ジーニアス・ローバーンの言葉にもあった気がします。レオン様、

私も応援致します！ 頑張ってくださいね」

彼女は尊敬の眼差しで俺を見て、ニツコリ微笑んだ。ああ、なんという素敵な笑顔！

そうこうしている間に、俺達は女神像の前に着いた。3メートルはある大きな石像。サラサラの長い髪に頭には花の冠をかぶっている。微笑むように見下ろす優しい表情の女神。

俺はその足元に片膝を突くと、祈りを捧げようとする。さて、なんて言おう。「われに勝利を与えたまえ」とかでいいのかな？ そんなことを考えていると、

『神への祈りは感謝であれ。子供の駄賃にもならぬ賽銭さいせんを払って勝たせてもらおうなど甘いにも程があるわ。』我が戦いをとくご覧あれ』とでも言うっておけば良いわ』

困った時の知恵袋、ジーニアス卿の登場により、お祈りの作法はバッチリだ。

「ごほん、ええ、女神フラウ様、いつもありがとうございます。今度の馬上槍の大会、私の戦いぶりをとくご覧あれ」

祈ったあとに女神の足元にある、直径2メートルほどの花の形をした石造りの池に銅貨を一枚投げる。そして立ち上がると出口に向かう。フローラも外まで見送ってくれるらしい。

「レオン様、珍しいお祈りですね。普通は女神様をお願いをする方が多いのですが・・・」

あのジジイ！ 適当なことを教えやがって。俺は怒りに腹の奥がメラメラ燃えたが、努めて冷静なふりをしてフローラに言葉を返した。

「はっはっはっ、言われてみればそうですね。しかしワタシは思うんです。わずかばかりの賽銭さいせんで勝利を乞うこなど恥ずかしいことではないかと。ワタシは女神様に見ていて頂きたかったんです！ 女神様が見ているとなれば、無様な戦いはできませんからね」

情熱的に語る俺。良く言ったぞ俺。こんな素晴らしい切り返し、今後一生できないと思う。俺のとなりの言い訳を聞いて、ますます感心したようにフローラは言った。

「レオン様は本当に高潔なお考えを持ってらっしゃるんですね」

俺は、いやあそれほどでもないながらデレデレした顔で歩いた。至福の時間はあっという間に過ぎ去り、神殿の玄関に到着。俺は名残惜しかったが帰らぬわけにはいかない。

「フローラさん。今日は無理を言って入れて頂き、ありがとうございます」

「いえ、そんなこと。私もわずかばかりですが、お力になれたみたいでよかったです」

「それでは、ワタシは失礼いたします」

なるべく優雅に見えるように礼をして、俺はふたたび帰路についた。

「レオン様！」

フローラさんの声に振り返る俺。まさか、「よかつたら、お食事でもいかがですか？ この前のお礼に（照）」「なんですって、よろしいんですか？ ならばいただきます（キリッ）」なんていう展開じゃないか！？ あの表情、間違いない！

「・・・また、お待ちしています」

予想とは違ったが、フローラさんの言葉と花のような笑顔に俺は完全にデレデレになった。

「ええ、必ず参ります！」

俺も笑顔を返す。満面の、とびっきりの笑顔だ。俺はどうしようもない位燃えていた。午前中の馬上槍の試合の無様な敗北など、遥か彼方に消え去ってしまった。

神殿から外に出て、しばらく歩くと俺は叫んだ。

「今の俺には勝利しか見えないぜ！」

俺の雄叫びに、ジーニアス卿は呆れた顔で呟いた。

『単純な奴じゃ』

ジーニアス卿は呟いたあと、まんざらでもない顔をしていたのを俺は見逃さなかった。

Knight Be Ambitious

大志を抱いた騎士

第1章第七

誤字脱字、表現の違和感、ストーリーの不明点、作者の異常に付いてご意見受け賜ります。

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章第8

ガンガン進めて、早く試合へ行きたいです。

休日の乗馬場。今日もコースを逆走する俺。もはや慣れっこで羞恥心もかなり無くなってきた。正面に馬の姿が見えると、あっという間に接近する。俺は相手の馬に合わせてスピードをコントロールし、槍を持っているイメージでタイミングを合わせて突く。ただ馬を走らせるのと、イメージしながら行うのでは断然違いがあるということに、俺は最近気がついた。

ここ数日、俺は馬上槍の練習にかつてないほど力を入れていた。理由？ 当然、モテるためだ（フローラさんに！） フローラさんに馬上槍の大会で絶対優勝すると大見栄を張ってしまったのだ。これで負けたら本当に格好悪い。彼女のハートを射止めるため、もう優勝しかないと思ってる。うん、いやマジで。なので、もう勝てる勝てないとか、練習が恥ずかしいとか、疲れるとか、言ってられん！

フローラさんに会って以来、練習に力を入れるようになった俺に、ジーニアス卿は『ワシが言っても全然集中していなかったクセに、女で気合が入るとは、単純な奴じゃ』などと事あるごとに、愚痴をこぼしていたが、もちろん無視です。男って本当にそんなもんなんです。

早朝練習の際も、巻藁まきわらを突くときに、完全武装姿で現れたジーニアス卿が、敵役として練習に参加してくれるので、臨場感が違う。ジーニアス卿は幽霊のためか、服装は自由自在だし、幽霊馬に乗って現れることもしばしばある。幽霊とは非常に便利なものなんだなと俺は感心した。

今日も休憩を挟みながら3時間以上も馬に乗り続けた。おかげで

尻が痛い。このあと、帰宅後は、歴史書や英雄の自伝などを読むことになる。ジーニアス卿に、本を読め本を読めと口酸っぱく言われ続け、ついに本を読むことにした俺だが歴史書はいまだに苦手だ。しかし、英雄達の自伝の方は楽しく読んでいる。ためになることも多いし、英雄達の考えていることは俺達の常識と正反対であることが多い。何人かの英雄達の本を読んだが、共通している点がある。それは、『たくさん恥をかけ』とか、『余計なことを考えず、目の前のことに集中しろ』とか、そんなことが書いてあった。思えば俺は練習中でも、この練習で強くなれるのかなとか、こんなことやってなんの意味があるんだとか考えながら練習していたから、集中できていなかったのかもしれない。

そんなわけで最近の俺は、文武両道のご立派な騎士になってしまったわけだ。はっはっはっ。こんなことジーニアス卿に聞かれたら、『ひよっこが何を言っとるか！』とか怒られるんだろうな。

とにかく借りていた馬を馬小屋に戻して帰ろうとしたところで、思いもかけないことが起こった。

「ねえ貴方、騎士なの？」

声をかけてきたのは、美しい女性だった。年の頃は、20代後半と言ったところか、赤いショートカットの髪。ややキツそうな目付き。口元にあるホクロがセクシーだ。体は細く引き締まっていて、女性には珍しく細身のズボンを履いている。フラウワ王国では、女性性はスカートを履くのが一般的であり、ズボンを履くのは品がないとされているのだ。

「ええ、騎士ですよ」

『民には優しく』というジーニアス卿の言葉にしたがって、笑顔で丁寧な言葉を心がける俺。美人相手だからではないぞ！ 決してないぞ。・・・たぶん、ないぞ？

「あら、騎士様が休日も乗馬の練習なんて珍しいわね」

「練習とは限りませんよ。ただ気晴らしに走り来ただけかもしれないよ」

俺は余裕を持って言葉を返した。すると美女は、

「ふふふっ、気晴らしにコースを逆走するなんて、おかしくありませんこと？ 騎、士、さ、ま」

と、含みのある笑顔でウインクしてきた。

俺、ちよつとドキツとしちゃった。ああ、フローラさんというものがありませんながら！ 俺の馬鹿っ！ スケベ！ しかしこの美女、「騎士が休日に練習するなんて珍しい」とは、ちよつとトゲのある言い方をするな。まあこの国の騎士はみんな向上心とかなないからね。休みの日に練習している奴なんて確かに珍しいだろうな。

「はっはっはっ、言われてみればそうですね。今度馬上槍の大会に出るので、その練習をしていたんですよ」

俺は大らかに思われるように、声を出して笑い、笑顔で答えた。

「あら、大会に出場するの？ 騎士様お名前はなんておっしゃるの？」

「レオンハウトです」

「所属は？」

「えっ、所属ですか？ソレイユ騎士団ですけど・・・」

「何番隊？」

「4番隊です」

「班は？」

「第9班ですが・・・なぜにそんな細かいことまで？」

「え、ああ・・・実は、真剣に練習する貴方のファンになっちゃって、応援するなら細かい所まで知っておかないと。ファンてそういうものでしょ」

美女は、ほほほつと笑う。なんと、ついに俺にファンが出来てしまったか・・・。確かに、最近は身だしなみにも気を使うようになったし、練習も真剣にしているため、体もかなりしまつてきて筋肉も付いてきた。さらに、本を読んでるから、俺の目から叡智が滲み出てしまつてもおかしくない。そうか、そこまで俺はかっこよくなつてしまつていたのか！

「とにかく、大会には応援に行きますわ」

そう言つて去ろうとする女性。

「ありがとうございます。大会は期待に添えるようにがんばります」

よ！ところで、貴女のお名前は？」

「・・・ルージュですわ。では、大会の練習がんばってくださいね」

そう言うのと、ルージュは赤い髪を揺らして去っていく。うーむ、これは、モテ期という奴かも知れぬ。

家に着く前に本屋による。本屋と言っても、雑貨を置いてある中に何冊か古書が置いてあるというだけに過ぎないのだが。

通り沿いにある小さな雑貨屋。古書も何冊か扱っており、本棚に並んでいる。本当に雑貨屋という感じで、家具、食器など生活に密着したものから、訳の分からない異国の置物まで様々な物が並んでいる。切り盛りしているのは、うちの母親よりも年のいったおばさんだ。

「おつ、あんちゃん最近よく来るね。また本かい？ 若いのに勉強家だねえ。学者さんか何かなのかい？」

店のおばさんが声をかけてくる。『民には優しく』ジーニアス卿の言葉を思い出しつつ、笑顔で答える。

「ワタシは騎士なんですよ。最近は知識も必要だと思い、本を読むようにしています」

実際はジーニアス卿に耳にタコが出来るほど、本を読め本を読めと言われ続けてようやく読むようになったんだけどね。

「へえ、騎士様だったのかい。若いのにしっかりしてるね！ お見^み逸^それしました」

冗談まじりに頭を下げるおばさん。俺もははっと笑って、

「騎士といつても気を使わないで下さいね」

と返す。

近年の騎士は昔と違い、国を守るために外敵と戦うのではなく、国内の違反者を取り締まるのが主な仕事となる。そのため、民衆の認識ではちよつと違反すれば捕まえられてしまうという気持ちが強くなってしまうている。昔であれば、守ってくれる味方であったはずの騎士が、今は些細なことで民衆を取り締まる、民衆の敵とまではいかないが、嫌な連中になりつつあることは間違いない。

「騎士と言ったら、尊大で嫌な奴が多いと思っていたけど、あんちやんみたいに良い騎士様もいるんだねえ。ほんと、感心するわ」

騎士は嫌な奴が多いって、ずいぶんストレートに言うなあ。まあ、本当だけどさ。そのなかで、俺はおばさんに褒められ照れる。最近思うのだが、こちらが愛想を良くしていると、相手も良くしてくれることが多いとわかった。今までは、相手が愛想良くしてきたら自分もという感じだった。自分から先に良い対応をすることで、相手をいい人に変えることが出来るんだなとつくづく思う。本にも『まず先に与えるべし』と書いてあったし、ジーニアス卿も同じようなことを言っていた。

「騎士様っていえば、もうすぐ大会だね。あんちゃんには出ないのかい？」

「馬上槍の大会に出ますよ」

「あんたが馬上槍い？」

おばさんは品定めをするように俺を上から下まで見回す。

「本ばかり読んでて大丈夫かい？ わたしも応援してやるから、頑張んなよ！」

おばさんはバシバシ俺の肩を叩いて大笑いした。

「ありがとうございます。カッコイイところを見せられるように頑張りますよ」

俺も笑って答えると、一冊、英雄の自伝を購入して店をでた。

いやあ、今日一日でファンが2人も出来てしまった。こりや、ますます負けられないな！

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章第8

誤字脱字、ご批判、応援等ございましたら、謹んでお受けいたします。

レオンの生活

早朝

乗馬場にて巻藁まきわらを突く。当たるようにはなった。まだ芯で捉える
までには至らない。

午前

剣術の訓練。相変わらず盾で突つ込む。ぶつかり合う。吹っ飛ば
される。延々繰り返す。ケガがないのが不思議なくらいだ。

午後

学科。歴史の講義は頭が痛くなる。そして、午前の訓練もあり、
睡魔が半端じゃない。

夜

帰宅後に本を読む。大陸最大の強国パリミヒの無敵將軍の伝記。
勇気、決断、大胆な戦略の数々。俺はすごく感動した。

早朝。

馬上槍の練習。ジーニアス卿に『槍先がブレている。しっかり狙
いを定めるんじゃない!』と指摘される。そんなこと言われても、馬上

じゃ揺れますって。

午前

乗馬場にて訓練。槍の練習。普通の練習だとそこそこの当たるようになった。

午後

パトロール。クォーンは相変わらず嫌な奴だが、ジーニアス卿に『笑顔』と『礼節』を忘れると言われた。クォーンにもなるべく笑顔で接する。きっと引きつっているだろうが。

夜

ジーニアス卿から昔話を聞く。眉唾まゆつばものの話もあったが、内容は面白く引き込まれる。

休日

午前

乗馬場にてコースを逆走。皆の奇異の視線を感じて、まだちよつと恥ずかしい。しかし、走っている間に全部忘れる。正面から来る馬とタイミングを合わせるのが大分上手くなった。

午後

神殿に向かう。フローラと会う。フローラは歴史に造詣ぞうけいが深いよ

うだ。特にフラウワ王国の歴史についてはすごく詳しい。ジーニアス卿の話題で盛り上がる。勉強家だと褒められ、俺の鼻は高くなり、鼻の下は伸びる。想像するとすごい顔だな。

夜

ジーニアス卿による婦人への愛の語らい方を伝授される。一部抜粋。

『おお、乙女よ。麗しの乙女よ。貴女のためなら千里を駆けていざ参らん……』

——古い

早朝

馬上槍の訓練。ジーニアス卿に『まあまあじゃな』とお褒めの言葉を授かった。

午前

学科。講義の内容はよく聞くと、歴史書や英雄達の自伝に書かれていることも多く引用されていた。内容がわかるようになってきたかも。

午後

パトロール。クォーンに馬上槍の大会に出るのかと聞かれた。出ますと答えたが、返答はなし。

早朝

馬上槍の練習。

午前

パトロール。

午後

剣の練習。 剣で槍のように突くこともジーニアス卿から許可された。

夜

本を読む。

早朝

練習

午前

講義

午後

乗馬上にて訓練

夜

ジーニアス卿のお話。

休日

訓練

神殿

早朝

訓練

午前

訓練

午後

パトロール

夜

本

訓練パトロール 本

訓練、訓練、本、神殿、訓練、勉強、パトロール、訓練、訓練、訓練

練訓練訓練訓練訓練訓練訓練。

そして、二ヶ月が経った。

風を引き裂くように駆ける。目前に迫る。鎧姿の騎士。相手の騎士の槍はこちらの眉間にピタリと標準を合わせている。

駆け抜ける。交差する。

相手の槍は寸分たがわずこちらの顔面を突いた。こちらの槍は、相手の脇に吸い込まれるように迫り・・・すり抜けた。

『今のタイミングは完璧じゃったぞ！』

上機嫌のジーニアス卿。

「ありがとうございます。でも、手応えがないから当たったかどうかイマイチわからないんですね」

俺がポリポリ頭を搔くと、ジーニアス卿は珍しく笑って言った。

『大丈夫じゃ。今の一撃なら間違いなく相手を落馬させられる』

俺は驚いてジーニアス卿をみた。こんな言葉をかけてもらえると

は思わなかった。

『さあ、もう仕事の時間じゃろっ』

言われて懐中時計を確認すると、確かにいい時間だ。俺は馬を返すためにトーマス少年の馬小屋に向かった。

パトロール中、不意にクォーンが話しかけてきた。

「朝訓練してるらしいな」

相変わらずボソボソとした喋り方だ。――いかにいかに、笑顔』を出さねば。

「はい、試合も近いですから」

「寝不足で遅刻するなよ」

ムッカーッ！ 本当にこいつは嫌な奴だぜ！ ドブにハマれ！
へドロにまみれろ！

「はい、仕事に支障が出ないように気をつけます」

俺はコメカミに青筋を浮かべたまま、引きつっているであろう笑顔で答えた。

「そっか、がんばれ」

・・・

えっ？ 今がなれっていった？ マジで？

「どうした、行くぞ」

あまりのショックで立ち止まっていた俺に、クォーンは声をかけてきた。

「あ、はい。ありがとうございます」

礼をいうと、クォーンはプイツと視線を逸^そらした。俺は不覚にも、ちよっと嬉しい気持ちになってしまった。

休日の午後。

神殿に入る。神殿はかなり広い。俺はキヨロキヨロしながら神殿の奥へ進む。

——いたっ！

前方斜め右手に、白いローブを纏ったフローラさん発見。花瓶に花を活けている。うーん。後ろ姿も美しい。

「ん、んっ、フローラさん。こんにちは」

俺は咳払いをして、いい声の準備をしてから話しかけた。

「あら、レオン様。こんにちは。今日もお祈りに？」

フローラさんの笑顔で癒されるわ。

「ええ。あとは神殿の空気に触れると、心が洗われるような気がして、休日にはつい足を運んでしまいます」

「確かに、神殿の中は静かですものね。——レオン様、もうすぐ大会ですね」

「ええ、今週末には大会前の予備戦が行われるので、緊張していますよ」

「ふふふ、レオン様も緊張なさるんですね。あんなに勇気がありますのに・・・」

彼女は初めて俺と会ったとき、俺が三人の傭兵を相手に一步も怯まずフローラさんを守ったと思い込んでいるため、なんだかすごい勇気ある立派な騎士だと思われるみたい。実際は、超平凡で不満タラタラのダメ騎士だったんだけどね。あの時も、足ガクガクしてたし、顔なんて多分真っ青だったよ。

「いやあ、さすがに・・・でも、楽しみでもあります」

俺は正直に言った。どこまで出来るかわからないけど、この3ヶ月、やれるだけのことはやったと思う。

「レオン様ならきつと優勝できますわ！　だって、沢山練習してらっしゃったんですもの。勝利のご報告、お待ちしております」

あ、やっぱり来てくれないのね。そりゃ仕方ないか。神殿の仕事もあるだろうし。

「はい、良い報告ができるように頑張ってきますよ。それでは！」

俺は綺麗なお辞儀をしてフローラさんの前から去る。その俺の背にフローラさんから声がかかる。

「お祈りはよろしいんですか？」

あ、一応それが目的だった。慌ててとって返す俺。フローラさんと目が合う。フローラさんは楽しそうに笑っていた。俺も釣られて笑う。

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章第1

次からようやく試合が始まりますよ！

書くのが楽しみです♪

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章 第1

貴重なお時間をありがとうございます！

衝撃。弾ける光。暗闇。声。

『レオン！ 大丈夫か！？ 意識はあるか！？』

ジーニアス卿のこんな焦った声を聞くのは初めてだ。俺の意識はすっかりしてる。目を開けて答える。

「・・・らいじょぶれす」

あれ なんか、クラクラしてる？ なんだ これ？

「ん？ 大丈夫か。ならば、二回目の打ち合い始めるぞ」

俺のジーニアス卿への返事を、自分への返事と勘違いした審判が、勝手に了解して旗を振る。中央で合図を待っていた主審が、俺側の審判の合図を受けて大きめの旗を振り上げる。主審の旗にはフラウ王国シンボルである五枚の花びらを持つバラが描かれている。バラの花びらは一枚一枚色が違い、赤、黄色、青、緑、黒となっている。これは、フラウ王国の5つの騎士団を表している。

『レオン。まだ体が言うことを聞かんなら、とにかく防御を固めてやり過ぎすのだぞ！ まだ勝機はある！』

ジーニアス卿の必死そうな声。冗談じゃない。まだ本番前の予選の段階なんだ。こんなところで負けるわけにはいかない。そうこう考えてる間に、中央の旗がバツと降り下ろされる。反射的に馬を走らせる。相手の馬がみるみる近づいてくる。相手を視認できる距離

まで近づいたとき、俺は感じた。こいつは強くない。だって、槍先がブレまくってる。

左籠手に付いた盾で体を隠しつつ、右手に持った槍を相手の腹のあたりの高さに合わせる俺。いや、正確には合わせようとした俺、だ。手に力が入らない。俺の槍先もぶるんぶるん震えている。これじゃあ狙いなんて定まりっこない。

彼我の距離は縮まり、交差は一瞬。相手の槍はこちらの肩をかすめて空を突いた。こっちの槍は、とつくに相手の居なくなった場所を突いていた。俺は、相手の陣地まで駆け抜けたあと、ゆっくり自分の陣地へ馬を歩かせて戻る。

『レオン。体が動かんか？』

ジーニアス卿が幽霊馬に乗って現れ、並走しながら聞いてきた。

「ええ、さっきは槍が全然持ち上がらなかったです。でも、今はこのとおり」

俺は槍をヒョイと掲げてみせた。辺りにいた観客から失笑が起くる。俺は手が動くところをジーニアス卿に見せたつもりだが、周りの者にはジーニアス卿は見えない。俺が今行なった動作は、勝っている騎士がアピールする時に行う行動なので、0対2でポイント負けしている俺が取るべき行動ではない。

『うむ、ようやく意識もはっきりしてきたようだな？ 打ち合いはあと一回。ポイントは負けている。相手の頭を打てば同点、気絶させれば勝利。だが、お前のすべきことは分かっているな？』

「はい、相手を落馬させることです」

『よろしい。レオンよ、お主ならば間違いなくできるはずじゃ。自信を持って行け！』

言われるまでもない。散々練習してたし、タイミングもバッチリだ。俺は自信をもって頷くと、自陣に戻り開始位置につく。自陣側の審判が主審に合図を送る。主審は頷き国旗を振り上げる。

大丈夫。やれることはやった。俺ならできる。ジーニアス卿のお墨付きだ。

国旗が翻る。

自陣の審判が行けと声をかけてくる。その時には、俺は馬の腹を蹴っていた。相手のスピードはやや速い。こちらはスピードをやや遅くして、いつものすれ違うスピードを調節し、いつものタイミングに近づける。数百メートル離れているが、馬で走れば距離は一瞬で縮まる。

相変わらず相手の槍はぶれまくり。俺はすごく落ち着いている。相手の槍がこちらを逸れることは突く前からわかっていた。俺は練習通り、相手より一瞬遅れて突く。

二頭の馬は通り過ぎ、俺は相手の陣地を駆け抜ける。手応えは十分。槍を見ると、先端の陶器は割れている。顔に当てて割れば2ポイントだが、今のは胴体だから1ポイントだ。

俺は自陣の方にいる相手の騎士を見る。大きく体が右に傾いている。腰に引っ掛けた安全紐のおかげで完全な落馬は防がれてい

あれは落馬と判断される。自陣にいる従者と、審判の手伝いで相手の騎士が地面に下ろされる。

その瞬間、俺の勝利は決まった。

『まったく、ひやひやしたわい！』

そりゃ俺だってそうだよ。俺はジーニアス卿の言葉に俺は心の中で答える。

先程の試合の後、午後の試合の前に軽く食事をとっているところだ。

ちなみに、今日は6月最終週の週末。6月30日である。1週間が6日だから、今日は一般的には安息日きふじつである闇の日だ。明日から7日間大会が行われ、大会1日目は光の日、二日目は火の日、三日目は水の日、四日目は土の日、五日目は風の日、六日目は闇の日、そして大会最後の日、7日目の光の日には馬上槍の決勝が行われ、その後、受賞式となる。

出場人数の多い馬上槍の試合は予選が行われる。今日がその予選の日で、俺は後2試合勝ち抜かなければ、そもそも明日から始まる大会にでられない。大会で馬上槍の試合は、1日目に2戦と3日目に2戦と、5日目準決勝、そして最終日の7日目に決勝戦が行われる。

俺はとりあえず、初戦を勝利で飾ることが出来て安堵した。いやでも、実際には相当ギリギリの状況だった。ジーニアス卿に確認した所だと、俺はさっきの試合で、しょっぱなから相手のラッキーパンチ的な槍の一撃を顔面に受けたらしい。あまりに綺麗な一撃だったから、俺の意識は混濁してしまったようだ。

そんなわけで、危うく一回戦負けするところだったが、辛くも勝ちを拾うことができた。

「レオンハウト・フォレスターいるか？ 2試合後に出番だから準備をしてくれ！」

大会の係員とおぼしき騎士がやってきて、声を張った。俺は立ち上がると、視線を騎士に向けて頷く。騎士も行くぞという意味であることはわかったらしい。大会の係員騎士は用が済むとさっさと居なくなってしまう。俺も早く行こう。遅刻して失格なんて洒落にならない。俺は軽食の代金をテーブルに置いて、外に向かった。

ここで改めて馬上槍の試合について解説しよう。フラウワ王国の馬上槍の試合に出れるのは、15歳以上の騎士だけ。2百メートル離れた所から馬を走らせ、槍で打ち合う。

1試合3回の打ち合いがある。勝敗はほとんどポイントの高さで決まるが、例外はある。気絶、落馬、死亡は一発で相手の勝利となる。首から下に当たり、なおかつ先端の陶器が割れていれば1ポイント。首から上に当たり、なおかつ先端の陶器が割れていれば2ポイント。相手の馬を狙う攻撃、槍を突き出した状態で相手に当てる

行為（通称ラリアット）と呼ばれる行為は反則となり、減点、もしくは失格となる。

槍は2メートル半の木製。先端の槍先部分には、丸みを帯びた陶器がかぶせられる。さらに言つと、陶器が割れると破片が飛び散り、目に入ると危険なので、薄手の布が巻かれている。それでも陶器の破片は散るが、量は圧倒的に少なくなる。

今回、俺はジーニアス卿からルール上で有効な落馬をさせる方法を学んだ。通常であれば、落馬なんて、相当馬術がヘタか、かなり良い一撃を食らわなければまずありえない。気絶に関しても、先端は陶器で出来た槍であり、槍の長さも短いため、当たりどころが良くなければ気絶するほどの攻撃は繰り出せない。なんと言つても槍の先端は簡単に割れる陶器製だし、槍自体も試合用の強度が弱く、相手に与える衝撃が少ないように設計されている。

そんなわけで、予選1試合目で見せた俺試合は相手の落馬と言うことでそこそこの話題になったようだ。予選2試合目も、少なからぬ人が見物に来ていた。

対戦相手は、今年初参加の正騎士1年目の若者だ。まあ、俺もまだ18歳で十分若者なんだが。相手の若き騎士も予選の一試合を勝利してきているため油断は禁物だ。

俺は精神を集中させつつ主審の方を見る。ほどなく、主審の手にもった大きな旗が振り上げられる。俺も、相手の騎士も引き絞られた矢のようにジリジリと合図を待つ。

——バサッ！

俺と、相手の若い騎士をつなぎとめる見えない綱を、主審の旗が斬った。同時に駆け出す俺と若い騎士。若い騎士は血気盛んな若者らしく、全速力で馬を駆けさせてくる。俺は、相手に合わせてスピードをコントロールする。

目でハッキリと若い騎士の様子を確かめられるところまで近づいた。馬に乗る姿は非常に安定している。馬術が得意なんだろうな。だから1年目にもかかわらず、大会に参加したのだろう。しかし、槍の構えがお粗末すぎる。槍の練習をあまりしていないのだろう。

相手の繰り出す槍を盾で受け、刹那の時を待つて繰り出された俺の槍は、若い騎士を捉えた。若い騎士の陣地まで駆け抜ける。すると、相手の陣地にいた若者の従者が話しかけてくる。

「相打ちだな。だが、あんたの攻撃は遅いから、坊っちゃんにはあたらなかったのかと思ったがな」

相打ちと言ったのは、お互いの槍の先端が割れ、互いに胴を突いたので1ポイントずつとったと言う意味だ。壮年の従者は俺の攻撃があたったのはまぐれだと言いたいのだろう。

「まぐれだけど当たって良かったよ。来年もし当たるときはもっと練習しておくよ」

「来年？」

俺の言葉に、頭をひねる若い騎士の従者。普通に考えれば、このあとまだ2回打ち合いが残っている。しかし、俺の手に残る感触は、戦いの終わりを告げていた。俺はそのまま大きく弧を描くようにして移動し、自分の陣地を目指す。自分の陣地に目を向けると、そこ

には従者と審判に支えられて馬からなんとか降りる若者の姿。たった一撃で勝負は決まった。

その後の予選最終試合も、一回目の打ち合いで相手を落馬させて勝利を勝ち取った。一日に3回、対戦相手の全てを落馬させた男。その話は一気にダリアの街に駆け巡ることになった。

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章第1

誤字、脱字、未熟な点のご指摘などお待ちしております。

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章 第1

読んでいただいて、毎度ありがとうございます。

ついに始まった騎士大会。^{ナイツ・オブ・シヴァリー}年に一度、フラウワ王国全土から騎士が集まり開催される年に一度の大会。

この日は聖都ダリアは盛大な祭りとなる。重装備の騎士達が、己の力と技を惜しげも無く出し切って闘うこの大会は、夏の暑さと相まって、毎年熱狂的な盛り上がりを見せる。

初日の午後、ローバーン城の乗馬場^{ジヨスト}で馬上槍試合が開催された。予選を通過した者達が集い、いずれも予選で3勝した者達だ。弱いことはまずないだろう。

俺は自分の順番まで、試合を眺めて待つ。何人かは強そうな奴がいるが、飛び抜けて強いという奴はいない。去年のベスト8はシードになっているため明後日まで出場しない。そのためか、俺は少し緊張感を失っていたが、大会の係員の者に試合の準備を呼びかけられると、突然緊張が始まってしまった。だからといってどうしようもないので、準備をし、そわそわした様子で乗馬場に入っていく。

乗馬場は綺麗に飾りつけがされている。貴賓席も設けられており、大貴族がその席を陣取っている。貴族から民間人まで多くの人が詰めかけており、立ち見の者もかなりいるようだ。

「一回戦、第7試合、東の陣、ソレイユ騎士団所属、レオンハウト・フォレスター！」

主審が声と共に俺の方に旗を向ける。俺は槍を掲げて観客にアピールする。

「西の陣、エクリプス騎士団所属、ガバロ・インドル！」

反対側の陣地にいる真つ黒な鎧に身を包んだ男が槍を掲げる。フラウワ王国の五大騎士団の一つ、エクリプス騎士団は通称『黒騎士』とも呼ばれている。

俺の所属するソレイユ騎士団とエクリプス騎士団は非常に仲が悪いことで有名だ。特に30代の騎士にはその兆候が強い。

その理由は、俺が騎士団に入る前の話だ。将軍が騎士団の治安維持の成果を上げるために、騎士団同士の対立構造を作って競い合わせることによって成果を上げようとした。

ソレイユ騎士団には、エクリプス騎士団に比べてお前たちはなんだと罵り、エクリプス騎士団に対しては、ソレイユ騎士団を見習えなどと言って双方を煽った。当初は目論見道理、治安維持が強化されたのだが、それ以上の問題が起きてしまった。

騎士団が、犯罪の検挙率を増やすために、どんな小さな罪でも見逃さず検挙し、あまつさえ軽犯罪を事前に止めず、起こってから犯人を捕まえるという者さえ出始めた。これによって、国民の不満は大いに高まってしまい、苦情が殺到した。

これを受けて将軍は、直ちに無茶な検挙をやめるように指示を出したが、ソレイユ騎士団とエクリプス騎士団の不和だけは残ってしまったと言っわけだ。

アンガルド
「構えっ！」

主審の声に俺は体をやや前傾姿勢にして、馬を走らせる準備をする。

「待ったあああっ！」

主審に劣らぬ大きな声を上げたのは相手のカバロ？いや、バカロだったか？ まあ、仮にカバオということにしよう。

そのカバオが主審に、いや会場の全員に聞こえるように言った。

「対戦相手である、フォレスター殿の武具の検査を要求します！」

ざわつく会場。俺の武具がどうしたというのか？

「武具の検査は試合前に行われているはずだが？」

主審はカバオに理由を問い正す意味で聞く。

「たしかにそうです。ですが、そのあとすり替えられない訳ではないでしょう。フォレスター殿は、昨日の予選において3戦し、3戦とも相手を落馬させて勝利をしたと伺^{うかが}っております」

「二人の騎士、中央に！」

主審に言われ、馬を歩かせる。カバオも近づいてきた。30代後半くらいだろうか、ヒゲもじゃで寸胴の男だ。

「フォレスター選手、先ほどのインドル選手が言ったことは本当かね？」

「はい、間違えなく昨日の予選で3戦し、3戦とも相手の落馬で勝利することができました」

「審判殿、お聞きになれましたな？ 3戦も連続で相手の落馬による勝利となると、いささか尋常な試合とは思えませぬ」

俺の返答に眉間にシワを寄せる審判。実際カバオの言うとおり、相手の落馬で勝利するのは一回の大会の全試合の中で一度有るか無いかと言った出来事だ。怪しいと思われても仕方がない。

「何らかの話し合いがあったか、あるいは特殊な道具を使っている可能性がありますからな。もちろん私はそんなことはないとは思いますが」

そういつてニヤリと、悪そうな笑みを浮かべてこちらを見るカバオ氏。完全に俺が卑怯なこととしてる前提で考えてるよね？

「フォレスター選手、武具の検査をしても良いかね？」

審判に聞かれた俺の答えはもちろん・・・

「構いません」

俺は堂々と胸を張って言ってやった。カバオは目を向いて驚いている。俺が拒否するとか、憤慨するとか思っていたのだろう。

主審を筆頭に、自陣と敵陣にいた副審が集まり、俺の槍や盾、馬の鞍くらまで丹念たんねんに調べて回る。もちろん結果は異常なし。

「フォレスター選手の武具に特に異常は見当たらなかった。インド

ル選手、よろしいかな」

「バカなっ！・・・もちろん、結構です」

カバオは悔しそうに歯を食いしばって言葉を吐き出した。

「では、改めて各人、準備を！」

主審に言われて俺は自陣にもどる。カバオも俺の方を憎々しそうに睨んで自陣に戻っていった。

（あの小僧、さては予選に通過したくて改造槍を使ったが、本戦では使わずに戦うつもりだな。改造槍がないのなら、実力で叩きのめしてくれるわっ！）

なんてことをカバオが考えていたとは露知らず、俺はほどよく緊張がほぐれて、意気揚々と馬を走らせた。

2百メートルの距離を置いて、再び対峙する俺とカバオ、中央の主審が旗を掲げて声を張り上げる。

「アンガルド
構えっ！」

俺は相手に集中し、馬の手綱を強く握る。

「アレ
初めっ！」

主審の合図に馬を走らせる俺。接近してくるカバオの馬にスピードを合わせる。

やがて、カバオの姿がはつきりと見える距離まで近づいた。カバオは予選を勝ち抜いてきただけあって、腰も落ち着いているし、槍先もあまりぶれてない。しかし、

—— ジーニアス卿と比べたら！

俺は幽霊馬に乗ったジーニアス卿と散々模擬戦をやったんだ。ジーニアス卿の迷いのない、こちらの眉間をピタリと狙った槍先と、何より炎のような闘志を秘めた瞳。あれに比べれば、こんな奴なんて。

俺とカバオはすれ違いざまに槍による一撃を放っていた。

カバオの槍は胴を守っている俺の盾に叩き付けられて、簡単に槍先につけた陶器が割れる。これでカバオは一ポイントだ。

俺は敵陣まで駆け抜けけると、自分の槍先を見る。割れている。手応えも合った。成功だ。

自陣の方を見ると、馬から身を乗り出すようにしてバランスを崩しているカバオの姿。この瞬間、俺の勝利は決まった。

試合が終わり、俺が乗馬場から退場していると、観客席の一番端まで来たところで声をかけられた。

「レオンさん、一回戦突破おめでとうございます！」

「トーマス、見に来てくれたのか！？」

「予選も見に来たかったです、仕事で来れなかったんですが、でも、今日の試合見れて良かったです！ レオンさんすごく強いんですね！」

トーマス君はかなり興奮してるようで、目をキラキラさせながらしゃべっている。

「ありがとう。次の試合も頑張るよ！」

俺の言葉にトーマスはさらに興奮したようで、

「次の試合も応援してます！・・・レオンさん、僕もレオンさんみたいな立派な騎士になりたいです！」

トーマス少年の無邪気な夢。しかし、フラウワ王国では騎士になれるのは貴族のみ。平民では、従者であり、兵士になれるだけだ。騎士には、なれないんだ。だが、俺の口から出た言葉は、

「そうか、きつとなれるさ！ では、私は次の試合の準備があるから行くとするよ」

俺はトーマス少年に手を振って馬を歩かせる。少年に夢を持たせるつもりだったが、よかったのだろうか。

大会1日目の2試合目も、俺は相手の騎士を一撃で落馬させることに成功した。

5戦連続、相手の落馬により勝利する。こんなことは、今までの
ナイツ・オブ・シヴァリー
騎士大会1度もなく、前代未聞の出来事であった。

試合後、2戦目に戦った騎士は語った。

「何が起きたかわからない。奴の槍はすれ違う寸前まで、確かに動
いていなかったのに、走り抜けたあと俺は衝撃を受けて、気づいた
らどうにもならないくらい、バランスを崩してしまっていたんだ。
奴の槍は見えない。あれはまるで・・・」

ファントム・スピア

【幻槍】

騎士大会にルビ振りました。過去のものも加筆予定です。

レオンハウトの二つ名を【亡霊の槍】↓【幻槍】に変更しました。

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章 第1

開いて頂きありがとうございます！

レオンハウト・フォレスター、連戦連勝の快進撃の報はダリア中に広がった。

大会3日目、俺の試合になると、とてつもなく大勢の人が詰めかけ、会場に入りきれない。

「おおつ、あれが【ファントム・スピア幻槍】のレオンハウト様だぞ！」

街の人が口々に呟く声が聞こえる。俺にも二つ名と言う奴が付いた。それが【ファントム・スピア幻槍】だ。本当は目に見えぬという意味が込められているらしい。

「ジーニアス卿、【ファントム亡霊】だなんて言い得て妙ですね」

俺は周りから見たら独り言に見えてしまうため、口を動かさないようにしてジーニアス卿に話しかけた。ファントムというのは亡霊という意味もある。つまり、【ファントム・スピア亡霊の槍】とも言える。確かに、幽霊であるジーニアス卿に教わった槍術なのだから、【ファントム・スピア亡霊の槍】まさにその通りである。

『亡霊とは失敬な！ レオンよ。お主はまだまだ礼儀に欠けておるようだな』

ジーニアス卿は不機嫌そうに言った。

「すみません、ジーニアス卿。しかし、私が言ったわけではありませんから」

言って俺は笑いを噛み殺した。事実、俺が言ったのではなく言い出したのは、騎士や町人達だ。

言い返すこともできず、惘然とした表情を見せるジーニアス卿。普段口を開けば説教ばかりしているジーニアス卿が不貞腐れている姿は、なんだか可笑しかった。

試合会場内は異様な熱気に包まれていた。何しろ、今日の試合は勝ち抜いてきた8人の騎士と、去年ベスト8に選ばれたベスト16の騎士が戦うトーナメント戦の日だ。今日2戦勝てば、明後日には準決勝が行われる。

俺の相手は去年の4位以下の選手である。同じソレイユ騎士団所属で、騎士団のカラーである黄色の鎧を身にまとっている。ちなみに、俺の鎧は普通の鉄の色・・・いや、古びてくすんだねずみ色だ。これは、馬上槍の訓練用の鎧である。自分で防具をそろえられるほどお金もなかったし、騎士団から支給されている鎧は、俺の場合ダリア市内のパトロールなので白の皮鎧だけだ。一度でも、国境警備や、山賊の討伐などに参加すれば騎士団の鎧を与えられるが、最近の若い騎士で与えられている者はかなり少ない。

対戦前に中央の審判の前で貴賓席に向かって紹介されるため並ぶと、惨めさがひととき目立つ気がする。

大会1日目の時はそんなことを気にする余裕は無かったが、さすがにこれだけ注目されると、自分の格好も気になってくるというものだ。

『レオンよ。見た目など気にするな。大切なのは実力と、気高さで

あることを忘れるな』

ジーニアス卿が現れて囁く。俺は力強く頷く。

——そうだ。今この瞬間、見た目は関係ない。必要なのは、敵を倒す実力と、不正を為さぬ高潔さ^{なこうけつ}だけだ。

ふと、笑いがこみ上げる。高潔^{こうけつ}さなんてことを自分が考えるなんて。ジーニアス卿に影響されたかな。

そうこうしてる間に、選手の紹介は終わり、俺と相手の騎士はそれぞれ開始位置についた。中央の主審が旗を振り上げる。

「構えッ！」
アンガルド

俺は遙か彼方の騎士に向かい、槍を構える。

「始めッ！」
アレ

降り下ろされる大きな旗。一気に駆ける騎馬。風を切るたび、頬を冷たい風が叩くたび、俺は集中していき、もはや相手の騎士しか見えなくなつた。

そして、勝負はやはり一度の打ち合いで決まつた。

「騎士のあんちゃん、試合見てたよ！」

他の選手の試合を見に行ったところ、後ろから突然肩を叩かれた。

すると、頭ひとつくらい低いところに、顔がある。誇らしげに胸を張ってニツコリ笑う中年女性。

「あつ、雑貨屋の……。本当に見に来てくれたんですね！」

「あつたりまえだろう！ 約束はきちんと守らなきゃね。商売人は信用第一だからさ！」

言つて雑貨屋のおばさんはガハハと笑つた。約束を守つて応援しにきてくれた。その言葉に俺は胸が熱くなつた。知っている人が自分のことを応援してくれる。それだけで本当に力になる。

「ありがとうございます！」

俺が深く頭を下げると、おばちゃんは少し戸惑つてから言つた。

「あんたがカツコイイところを見せてくれるって言つてたから見に来たんだよ。しかも、こんないい男じゃ見ないわけにはいかないさね！」

俺は湿っぽくなりそうなところを、明るく言つてくれたおばちゃんに感謝して笑つた。しかし、いい男なんて言われたの、久しぶりかもしれない。

「次もカツコイイところ見せられるように頑張りますよ！」

「期待してるよ！」

言つておばちゃんは俺の背中を強く叩く。俺はその一撃で、背筋をシャンと伸ばして会場から離れる。

その次の試合も、たった一度の打ち合いで、俺は嵐のように勝利を
もぎ取って行った。

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章 第1

誤字脱字、注意等ございましたら、なにとぞよろしくお願い致します。

開いていただきありがとうございます。

楽しんで行ってください。

今回はノンバトルです。

大会4日目の休日、馬上槍^{ジョスト}試合がないため、俺は午前中いっぱい体を安めた後、フラウ神殿に向かった。目的は、女神への勝利の報告である。

ああ、女神と言っても幸運の女神フラウ様の方じゃないよ。俺の女神様、フローラさんのことだからな！

意気揚々と町を闊^{かつ}歩し神殿にたどり着く。すると、いつもの門番が目を丸くして声を上げた。

「レオンハウト様！ よくおいでくださいました。昨日の試合見ましたよ。本当に興奮しました！ 馬上槍^{ジョスト}試合において、すべての試合を相手の落馬で勝利したなんて一人もいませんからね！ むしろ、連続で落馬させて勝利すること自体稀^{まれ}なわけですから。いやあ、試合の前からレオンハウト様を知っているということで、私も周囲からすごく羨ましがられるんですよ！」

門番は俺と会うやいなや、次々とまくし立て、身振り手振りで試合の興奮や感動などを話し始めた。まったく途切れる気配がなく、10分も話を聞いたところでようやく俺は言葉をねじ込んだ。

「それはありがとう。次の試合もがんばりますよ。ところで、女神様にご加護のお礼を申したいのだが、女神様はお忙しいかな？」

俺が冗談を交えて言うと、門番はしゃべりすぎていたことに気づいたらしく、ハツとして姿勢を正すと、

「女神様の神像は本日も神殿の奥に鎮座しております。どうぞ行つてらっしゃいませ！」

と、槍の石突で地面を叩く礼をして道を開けた。俺は再び礼を言つて奥に進んだ。門番の彼には悪いが、俺は一刻も女神様^{フローラ}に会いたいのだ。

神殿の中をずんずん進むと、白い修道服に身を包んだ女性の姿。あの美女は間違いなくフローラだ。後ろ姿だけで美人の空気が全面に醸し出されている。ああ、とりあえず結婚して欲しい。やばい、めちゃくちゃドキドキしてきた。好きだ。好きとしか言いようがない。心臓が、ドキドキする。顔が暑い。手に汗がべっとりだ。なんて声をかければいいのか。早く顔がみたい。

そんなことを考えながら歩いていると、フローラさんが不意に振り返った。目が合う。一瞬驚いた顔をしたフローラさんだったが、次の瞬間には花咲くように笑顔に変わる。

——可愛ええ！俺はだらしない顔になりそうなのをこらえて挨拶をした。

「レオン様、聞きましたよ！先日試合も勝ったそうですね。おめでとぅございます」

至福。まさに至福の瞬間だ。フローラさんに褒められた。今だ、今がチャンスに違いない。結婚を申し込むなら今しかない！妄想が暴走し、俺の口から飛び出す愛の言葉！

「フローラさん！ 今回の試合で優勝したあかつきには、私と結婚していただませんか（キリッ）」

フローラさんは頬を赤らめて身をくねらせる。

「レオン様、そんな急に……。でも、そうおっしゃってくださいるのを待っていましたわ」

「フローラさん、それはイエスと受けとつてもよろしいのでしょうか（キリッ）」

「レオン様ったら、乙女の口からこれ以上言わせないでください。レオン様の優勝は確実ですわ。不束者ぶつつかものですが、よろしく願ひします」

「フローラさんっ！ 一生幸せにします！」

俺はフローラさんをがしつと抱きしめる。フローラさんは俺の肩に頭を乗せて身を委ねる。

そして、ラアヴウ……

「レオン様、大丈夫ですか？」

突然妄想の世界に突入した俺に、フローラさんが声をかけてくる。

「あ、ごほん。全然大丈夫です。試合のこと、知ってらっしゃったんですね」

「ええ、気にかけて・・・ありがとうございましたから」

——聞いたッ！？ 今の言葉聞いた！？ 気にかけてたつて！ 俺のこと気にかけてたつてさ！ やばい、顔がにニヤてしまういや、でもしょうがないよね。好きな人に気にかけていたなんて言われたら、だらしのない顔になるのも、仕方ないよね！

俺は思わず自分のだらしのない顔を正当化する。よし、この勢いで言うぞ！

「あの、フローラさん。もし良ければ、試合を見に来ていただいけませんか？」

俺は頭を下げて言った。俺はすごく勇気を出して言ったぞ！！
そして、フローラさんの顔をちらりと伺う。

ガンッ！

完全に困った顔をしている。やっぱり、馬上槍みたいな野蛮な競技は好まないのだろうか。俺はちょっと悲しくなる。

「レオン様、実は私の二人の兄が故郷から騎士大会を見るためにこの街に来ているんですが、事情があつて兄と一緒にいるところを人に見られるわけにはいなくて。それで、ひと目の多いところにはあまりいけないんです。本当にすみません。でもこの神殿でフラウ様に、レオンハウト様の勝利をお祈りしております」

そうか、事情があるなら仕方ないか。でも、残念だな。さすがに残念だな。でも、無理を言つて困らせたくないしな。仕方ない。笑顔、笑顔を出そう！

「そうですか。少し残念ですが、フローラさんが応援してくれていると分かれば百人力です！ 明日の試合も勝ってきますよ」

俺は笑顔で、力強く言った。フローラさんは、パツと顔を赤くして、「応援しております」と言ってくれた。

そのあとも、フローラさんの家族の話や、故郷の話聞いた。どうやら、王都が故郷らしい。話からすると、やはり貴族のお嬢様らしい。

とりとめない話をしていると、随分時間がたってしまった。俺は名残惜しいが、いや、もう滅茶苦茶名残惜しくて、許されるならここで寝泊りしてもフローラさんと話していたいのだが、その気持ちをなんとか抑えて、フローラさんに礼を言つて踵^{かかと}を返した。

明日はついに準決勝。

相手はかなりの強敵だ。しかし、今の俺は誰が相手でも負ける気がしなかった。どんなやつでもかかってこい。俺には、女神^{フローラ}の加護がついてるのだから・・・

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章第1

誤字脱字、ご忠告とつ大募集しております。

Knight Be Ambitious

大志を抱いた騎士

第1章 第1

読んでくださってありがとうございます。

大会5日目

気づいているだろうか？ 今日、準決勝の日なんだ、ヒヤホウッ！ 嘘みたいだろ！ あの情けなくて、腰抜けで、なにもかもすぐ諦めてた俺が、騎士大会の花形種目である馬上槍試合ジョストで、準決勝まで来たんだ！ 本当に夢みたいな話だ！

でも、今回の対戦相手は生半可な相手じゃない。前回大会の準優勝者、赤き鎧に身を包んだ巨漢の戦士。スカルス・ブルーダー。赤き鎧は王家の親衛隊であるフラム騎士団の団員たる証である。どつしりと安定した乗馬術と、その巨漢からは想像出来ない正確無比な槍術。事実、今回の大会でも1度外しているが、それ以外は全て相手の顔面に槍を当てており、大量のポイントを獲得して勝利している。

試合前、準備を整えていると、見慣れた女が歩いてきた。最初は見間違えかと思ったが間違いない。赤い髪に、スレンダーな体を細身のズボンで包み、ややきつそうな目に、口元のセクシーなほくろ。ルージュだ。もとはショートカットだった髪型が、今はやや伸びて雰囲気は女性味を増している。

「こんにちわあ、レオンハウト様」

ほんの少しだけ語尾をのばすところも、色気を増している。

「ルージュさんでしたね。応援に来ていただけたんですか？」

「あつたりまえじゃない。私は貴方のファンなのよ」

そういつてフツと蠱惑的な笑みを浮かべるルージュ。俺の鼻の下は猿よりも伸びていたに違いない。

「でも、次の選手は強そうね。勝てるかしら？」

言われて俺は押し黙る。勝てないとは思わないが、簡単に勝てる相手ではなさそうだ。なんと答えるべきか迷う俺に、ルージュが言った一言は大きな影響を及ぼした。

「もし今回の試合で勝てたら、次の試合の時にはすごくいいことがあるわよ」

言つてウインクするルージュ。・・・イイコト？ ハッ、まさか。ルージュのような美女とめくるめくラブロマンスがツツ！？ ウオオオオオオオオオオ！

俺には気合がみなぎった。それを見届けるとうつすらと笑みを浮かべたままルージュは姿を消した。

ルージュが居なくなつたあと、俺はふと思った。ここは選手しか入れない一般人立ち入り禁止の場所である。彼女はどやって入つて来たのだろうか？

「これより、^{ジョスト}馬上槍試合準決勝を開始する！ 両選手中央へ」

——ワアアアアアアアアアア——

観客席から歓声が上がる。観客席を見ると、赤い鎧や、赤い旗を持つているものが多い。皆、スカルスの応援者達だ。フラム騎士団の赤騎士であるスカルスを応援するものは多くの者がその身に赤をまとっている。一方で、俺のファン也多いらしく、『ファントム・ファントム』とリズムのよい歓声が響いている。一部のファンは、フード付きのローブをまとって応援している。これは、『ファントム』を『亡霊』という意味で解釈した、仮装らしい。

主審の声に俺とスカルスは中央で並び、貴賓席の方へ顔を向ける。もちろん馬から降りて兜も取っている。しかし、スカルスはでかい隣に並ぶと頭一つ分違う。スカルスは思ったより若く、20代前半くらいだろうか？ 茶色の短めの髪にキリツとした眉の青年だ。

選手たちを差し置いて選手説明がされている中、スカルスが貴賓席の方を向いたまま俺に聞こえるように呟いた。

「お前の技の正体はわかってるからな」

俺は驚いてスカルスを見た。奴は、スカルスさっきの真面目な表情とは違って変わって不敵な笑みを浮かべていた。

まさか、本当に分かっているのか？ はったりか？ 俺は動揺し背には冷たい汗をかいていた。

しかし、考え直す。もし本当に分かっていたとしても、よけられない。それが『ファントム・スペア幻槍』だ。

「では両選手、礼を」

主審の声に俺はハツとし、貴賓席に礼をしたあとスカルスにも礼をする。スカルスはやはり不敵な笑みを浮かべて言った。

「さて、『^{ファントム}亡霊』退治といきますか」

そう言って背を向けると馬に乗って陣地に戻っていく。俺も遅れて馬にのり、陣地に向かった。なぜか、嫌な予感をビンビン感じていた。

「^{アングルド}構え！」

主審の声に、体をやや前傾にして俺は合図をまつた。二百メートルの距離を置いて、赤い鎧の騎士の姿が彼方に見える。これだけ離れていても、スカルスの闘気を感じるような気がした。本当の強者との戦い。俺は緊張していた。

『レオンよ。大丈夫じゃ。自分を信じ、力の限り戦うがよい』

いつの間にか現れていたジーニ阿斯卿が、馬の頭に手を触れながら俺を見上げていた。そういえば、ジーニ阿斯卿が姿を現す機会が減っている気がした。

「はい、絶対に勝ってきますす！」

力強く言う俺に、ジーニ阿斯卿は『気負うな』とだけ呟いて姿を消した。

——よし、集中だ。

「始めッ！」
アレ

主審の掛け声に一気に駆け出す俺。馬は風を切るように速かった。スカルスがはつきりと見える距離までやってくる。槍先は全くぶれていない。こちらの頭を正確に狙っている。彼我の距離がグングン縮まる。

——バギイ！

顔の前で音が炸裂する。俺は顔面を狙ってきた槍に、わずかに顔を反らせてしまった。しかし、体はタイミングを逃さず突きを放っていた。手応えは十分。俺は2百メートルを駆けきつて相手陣地に到着すると、自信をもって背後を確認する。スカルスの槍は俺の顔面を打っているため2ポイント。俺の槍は胴を突いているため1ポイント。ポイントでは1対12負けているが、スカルスが落馬をしているであろうことを考えれば、ポイントなんてあつてないようなものである。

観客席からは歓声が上がっている。ものすごい盛り上がりだ。顔面に槍を当てられることも相当な技量であるため、必ず歓声が上がると、俺の攻撃が必ず相手を落馬させるため、その時ももちろん完成が上がる。

しかし、予想を裏切って、スカルスはどっしりと馬上に座っていた。

バカなッ！俺の槍には確かに手応えがあつた。並みの選手であれば間違いなく落馬しているはず。スカルスの馬術が並外れているか、俺の突きの当たりが浅かったのか。どちらかだろう。自陣にもどる

時、スカルスとすれ違う。

「へへっ、『ファントム・スピア幻槍』破れたりってな」

スカルスはニヤリと笑ってこちらを見た。俺は頭にカツと血が上り、

「次は突き落としてやるよ！」

と荒々しく返事を返した。

自陣に戻ると、従者の少年（おれの専属ではない）が槍先の陶器を替えてくれる。少年は淡々と作業をし、槍を手渡してくれた。

さつきはスカルスの槍を恐れて、顔を反らしてしまった。そのせいで槍の当たりが浅かったのかもしれない。次は絶対に引かない。俺は決意を込めて、敵陣の赤い鎧を睨みつける。

俺とスカルスの準備が整ったことを、両陣営に待機している審判が、主審に旗で伝える。主審も旗を掲げて構えるように指示を出した。

——集中だ。集中。集中しろ。

俺は自分に言い聞かせる。

「始めッ！」
アレ

主審の声。ひるが翻る旗。走り出す馬。迫る赤騎士。スカルス奴の槍は、憎らしいほどブレていない。確実に俺の顔を射抜くだろう。俺は齒を食い

しばらく、顎を引き、顎を突き出すようにして衝撃に備える。

——バギッツツツ！！

額の左上の方に衝撃を感じた。しかし、おれは構わず体を振^ねじ込むようにして突きを放った。もう間違えない。完璧な、百パーセント完璧な突きだ。これで落馬しないなどということはありえない。俺は勝利を確信して走り抜けた。しかし・・・

背後を振り返れば、スカルスは落馬をまぬがれていた。かなりバランスを崩したようだが、持ち直していた。

この時俺は認めざるを得なかった。

『^{ファントム・スピア}幻槍』が敗れたことを・・・

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章第1

誤字脱字、未熟な点のご指摘とついでにありがとうございました、喜んで承ります。

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章 第1

読んでくださってありがとうございます！

『ファントム・スピア
幻槍』

これを受けた者は、気づけばその身は馬上から消えている。何をされたかも分からず、たった一撃で敗北してしまふ。

ナイト・オブ・シヴァリー
騎士大会を席卷したレオンの技。

しかも、騎士に取って落馬とは恥ずべきことなのだ。レオンと戦う騎士達は、誰もが落馬という不名誉の恐怖と戦わなければならなくなる。

まるでマジックのような技だが、どんなマジックにも種があるように、レオンの『ファントム・スピア幻槍』にも種がある。

『ファントム・スピア幻槍』とは、相手の騎士の脇腹を突く。ただそれだけの技である。

しかし、効果は絶大であった。

想像して欲しい。馬の背に乗った状態で、左手に盾、右手に槍をもった状態で横から押されると言うことを。ただでさえバランスを保つのが難しい馬上において、たすな轡を左手で持つてはいるが、支えもなく乗っているのだ。横から押されてバランスを保てる理由がない。

だが、タイミングは非常に難しく、早過ぎれば斜め前から盾を叩くことになるし、遅過ぎれば空を突くことになる。さらに、相手を真横から突くという性質上、攻撃するタイミングは、相手の攻撃よ

り後になるため、相手の攻撃を受けた直後の安定していない状態で攻撃を繰り返さねばならないという難しさもあった。

だが同時に相手にとっても攻撃した直後に横から突かれるため、不意を突かれることになる。通常の状態よりバランスを崩しやすくなっている。攻撃するときは、集中力が攻撃に向くため、隙ができるものなのだ。

非常に難しい技術だが、同時に、使いこなせるものがいれば、最強の騎士になると言っても過言ではない。

「うそだろ・・・」

俺は愕然とした。あれ以上どうしたらいいというのか。最悪なことに、ポイントの上では2対4。次に俺がスカルスの顔を打ち、スカルスが槍を外して初めて同点となる。しかし、スカルスは当然俺の胴を狙って突くだろう。スカルスの腕なら、胴を狙って外すことなどありえない。

そうすれば、仮に俺がスカルスの顔面を突くことができて4対5になり、俺の敗北が決定してしまう。もはや、スカルスを気絶させるか、落馬させる以外ありえない。気絶させるような突き方なんて知らないし、普通の奴が気絶するような突きも、頑強なスカルスファントム・スピアを気絶させることは不可能だろう。そして、頼みの綱の『幻槍』もスカルスの前で虚しく散ってしまった。

確定する敗北。俺は呆然として自陣に戻る。従者の少年が槍の先を付け替えている。どうしたらいい。もう勝ち目もない。果たして、3度目の打ち合いをする意味はあるのか。そもそも、準決勝まで残れたんだ。それでいいじゃないか。準決勝進出。大金星と言っているはず。俺はよくやった。

そんな言葉を心の中で呟くが、本当は分かっていた。それが虚しい言い訳であり、自分を正当化する甘い毒だということも。そんなとき、従者の少年が槍先を交換し終えて渡してくる。

「あの、レオンハウト様。頑張ってください！ 僕、レオンハウト様を応援しています！」

緊張した表情の少年従者。しかし、その瞳はまるで宝石のように澄んで輝いていた。

——ああ、こんなところにも俺のことを応援してくれている人がいたのか。

ふと思いつく。

乗馬場の下働きのトーマスくん。

雑貨屋のおばちゃん。

フラウ神殿の門番。

嫌な上司クォーンでさえ頑張れと言ってくれた。

ルージュは試合前にも激励に来てくれた。

こんなにも不利な状況にもかかわらず、『ファントム、ファントム』と声援を送ってくれる観客たち。数こそ少ないものの、仮装までしてくれている人たちもいる。

そして・・・今も神殿で俺の勝利を願ってくれているであろうフローラさん。

こんなにも多くの人に支えられて俺はこの場に立っているんだ。胸がカツと熱くなった。諦めるな！最後まで、全力で挑むんだ。応援してくれる皆が、俺の胸に闘志を灯す。

「^{アンガルド}構えッ」

主審の声と共に、大きな旗が中央で高々と掲げられる。俺はググツと手の中の槍を強く握りしめる。

「^{アレ}始めッ！」

弾かれたように駆け出す。勝てる、勝てないなどの迷いはない。奴を倒す方法は何かないか。気絶させるなら顔だろう。事実、俺も予選一回戦では顔面に槍を受けて危うく気絶するところだった。

いや、戦闘不能にするなら喉と言う手もある。鎧は喉も覆っているが、喉に衝撃をつけると、鎧越しでもダメージが大きく戦闘を継続することは難しいはず。いや、ダメだ。継続もなにも、この打ち合いでおしまいなんだから。

・・・なぜ、『幻槍』が効かなかったんだろうか。バランス感覚が非常にいいからか、馬術がうまいからか。いや、それだけではない。体重だ。体重が重く安定してるんだ。くそっ、体は引き締まってる太くはないが、体を覆う筋肉の鎧と、何といっても身長の高さだ。そうだ、身長の高さだ。それで体重が見かけよりも重く、馬と密着している胴のあたりは安定感が良すぎるんだ。

んっ？ 待てよ。つてことは・・・！

俺は一つ気づいたことがあった。これは可能性だ。成功するかどうかもわからない。だが、やってみるしかない。

俺の頭から思考の波が去り、霧が晴れたように視界が広がる。やるべきこと決まったからかもしれない。

迫ってくる赤き鎧の騎士。

30メートル。スカルスの槍先は俺の胴にむいている。スカルスは一切の油断をしない男だ。

20メートル。スカルスは笑いを浮かべているだろうと思う。槍先はまったくブレない。

10メートル。スカルスと目があつた気がした。

5メートル。スカルスは槍を突き出した。

2メートル。盾に走る衝撃。体の芯を射抜くかのような一撃。

0メートル。交錯する2頭の騎馬。

俺は、真横から一気に槍を突き出す。

手応えありだ。駆け抜ける。後ろは振り返らなかった。

しかし、振り返れば見えただろう。

ゆっくりと馬上から傾いていくスカルスの姿が、そして誰もが見たはずだ。スカルスが馬上から消えるところを。

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章 第1

種明かしは次回！

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章第1

いつもありがとうございます！

3回目の打ち合いの前に、スカルスは己の勝利を確信していた。

ポイントは4対2で勝っている。次の攻撃で確実に胴を狙って当てていけば、勝利は確実なものとなる。試合を盛り上げるため、最後の打ち合いもレオンの顔を狙おうなどとは考えてもいない。

スカルスにとってこれは真剣勝負であり、勝利こそが正しいとも思っていた。

2度に渡り『幻槍^{ファントム・スピア}』を破ったスカルスだったが、2度目はかなり危なかった。力強く突かれたスカルスの体は、わずかに馬上からずれていた。そして、走る馬の上ではわずかなことが命取りとなる。

しかし、落馬ばかりはなんとか凌ぎ^{しの}きつた。走る馬の上で体の位置がずれるなどということは危険極まりない。だがスカルスは得意の馬術と素晴らしいバランス感覚で、己の体を馬上に保った。

（あれ以上の攻撃はありえない。俺の勝利は確定した）

スカルスは思わず笑みを浮かべた。そして、二日後の決勝戦の相手に思いを馳せた。去年はその男に苦い思いをさせられた。このあとに行われる準決勝。確実にあの男は勝ち上がってくる。スカルスは確信していた。

そんな夢想も、審判の「構え」の声に破られる。

（そうだ。今は確実にこの試合に勝たないといけない。胴を狙って

突く。確実に当てる。それでしまいだ。集中。集中)

スカルスも一流の選手だ。すぐに気持ちを切り替え、目の前の試合に集中する。

審判の「始め」の合図とともに馬を駆けさせる。相手の馬に合わせて速度を調整する。速すぎてもタイミングがずれるし、遅すぎてもいけない。スカルスはレオンもスピードを調節していることに気がついていた。

微調整しながら、槍を突くタイミングをはかる。目前に迫ったレオン。

(あいつ、まだ諦めてないな)

兜ごしで顔が見えないにもかかわらず、レオンが諦めていないことにスカルスは気づいていた。しかし、だからといって負ける気はない。

(ここだ!)

タイミングを合わせて突き出した槍が相手の盾にぶち当たる。といつても、今回は得点目的の突きだ。目的は二つ。確実に当てることと、先端の陶器が割ること。その二つだ。だから、突きとしては力いっぱいではない。

——パキン

と陶器の割る軽い音。

(これで終わ)

ズガン！

耳元で大きな音。頭に衝撃。左から右へ押されるような感覚。しかし、しばらくすると押されていた感覚から解放される。反動で体が右から左へ。揺れる視界。

（世界が傾く？ いや、傾いているのは俺の方か！？）

慌てて体勢を立て直そうとするが、体が押された反動で右から左へ戻っていた時に、さらに左へと体を動かそうとしてしまった。予想外の速度で体が左へ傾いていく。慌てて制動をかけて右に戻そうとする。

(あつ)

突然体が支えを失った様にグラついた。先程までは、馬上に腰を据えた状態だったが、バランスを取ろうと、左右に重心を動かした結果バランスを失ってしまったのだ。

ゆっくりと、スローモーションの様に体が右へ傾いてゆく。もはや立て直すことはできない。ゆっくりと倒れた結果、体が地面と水平になった時点で傾きが止まる。鞍から鎧までつながっている落馬防止の安全紐のおかげだ。

ワアアアアアアアアアアアアアアアア
アアア!!!

割れんばかりの歓声が響いた。

慌てて駆け寄ってきた従者や陣地にいる審判の手により体を支えられつつ、安全紐を外される。そのときになってようやくスカルスは呟いた。

「俺は・・・負けた・のか？」

歓声が辺りを包む。俺はその祝福を全身に浴びながら、高々と槍を突き上げた。

本当にギリギリの試合だった。イチかバチかの掛けだった。

3合目の打ち合いで俺が選んだ戦術は、『ファントム・スピア幻槍』を頭部へ放つことだ。いくらスカルスのバランス感覚が良いとはいえ、重心である腰の位置から遠く離れた頭部へ攻撃を受ければ、バランスを崩すに違いないと思ったからだ（レオンは知らないが、支点力点の法則である）

奇跡的に成功したその一撃で、スカルスは予想通りバランスを保ちきれず落馬した。頭部へ『ファントム・スピア幻槍』を放つのは初めてで、成功するかどうかすら怪しかったが、結果的にうまくいった。もし、今回もスカルスが俺の顔面に槍を当てていれば、こちらの攻撃は成功しなかったかもしれない。

奴が胴を狙ったから、視界が遮られることなく頭部を見据えて槍を放つことができた。剣術の訓練の際、盾を構えてぶつかっていったことがここで生きた気がした。

歓声を浴びながら、俺とスカルスは中央で向かい合った。

「最後の攻撃、全然何されたかわかんなかったぜ。ただ、左耳の当たりが痛えから、頭を突かれたってことはわかったぜ」

言われた俺は疲れた顔に笑みをなんとか浮かべて言う。

「俺も顔に向かって『ファントム・スピア幻槍』を放ったのは初めてだったよ。最後の一撃、顔面に当てられていたなら、俺の攻撃は失敗していたかもしれない」

俺の言葉にスカルスは苦々しい表情を浮かべて言った。

「ちつ、全力を尽くしているつもりだったけど、最後の最後で全力よりも勝つための堅実な方を選んだのがアダになっちまったな。最後まで顔面狙いで行けばよかったぜ」

悔しそうに行ったスカルスだが、すぐに不敵な笑みを浮かべて手を差し出してきた。俺がそれに応じて手を差し出すと、

「決勝戦、絶対勝って優勝しろよ！」

言ってギュー！　っと手を握ったスカルス。

「ああ、絶対勝つよ！」

行つて俺も強く握り返す。数秒握手したあと、どちらかというのでなく、俺たちは手を話して自陣に戻っていく。

少年従者の喜ぶ声がする。観客からの歓声も相変わらず続いている。

俺はそれを背中に受けて、堂々と会場を去っていく。

決まった。完全にキマッタ。フローラさんが見に来てくれていれば、間違いなく俺に惚れただろうなあ。残念だ。

そんな思いを抱えつつ。俺は会場を後にした。

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章第1

次は決勝戦だ！

誤字脱字、ご注意等何かあればご指導くださいませ。

読んでいただきありがとうございます。

決勝戦の対戦相手のご紹介です。

準決勝を終えた俺は、次の準決勝第2回戦の偵察に向かった。この試合の勝者と俺は戦うことになる。会場はすでに満員状態で、俺は会場の最も後方で、立見の状態で見手の方を見る。

ひとりは騎士大会初参加にして準決勝まで残ったエクリプス騎士団の若き黒騎士。対するは、鮮やかな青の鎧に身を包んだ小柄な騎士。前大会優勝者であり、今大会も優勝候補筆頭、アリスト・R・ベリアル。

長々とした選手紹介が終わり、二人の騎士が自陣に戻る。従者が槍を手渡す。アリスト側でややもたつきがあつたが、咎められるほどではなく準備は終わった。

中央で主審の握る大きな旗が翻る。会場にいと聞こえる主審の声も、観客席のさらに奥のさらに隅にいる俺までは届かない。二人の騎士は走り出す。遠目から見ると、馬は結構ゆっくり走っているもんなんだと思う。

二人の騎乗姿勢を見る限りでは、二人共が相当な馬術の腕を持っていることは一目瞭然だつた。

黒騎士はやや前傾姿勢であり、アリストの方は、背筋を伸ばして堂々と走る。二人が交わる。繰り出される槍は、互いに相手の顔へ。こんなに遠くまで、陶器の弾ける音が聞こえた。

——
ワアアアアアアアアアアッ！

観割れんばかりの声が響きわたる。

ポイントは、2対0！？

相打ちじゃなかったのか。ポイントはアリストの方に入っている。黒騎士の槍もアリストの顔面を捉えたように見えたが、外していたのか。

続いて2回目の打ち合い。再び互いの顔を狙う二人の騎士。そのとき俺は、恐るべき光景を目にすることになった。

アリストは軽業師のように、馬上で仰向けになりながら相手の槍をかわすと、仰け反った体勢のまま自らの槍を繰り出し、相手の顔面を鋭く狙う。アリストの視線もくれずに突き出した槍は、狙いたがわず相手の顔面に突き刺さる。アリストは駆け抜けつつ、腹筋の力だけで体を起こすと、優雅に自陣に戻っていく。

——ピュー！ピューピュー！！

会場に甲高い指笛が響きわたる。観客もアリストのアクロバティックな動きに完全に魅了されていた。

相手の黒騎は、アリストの動きの異常さに憤懣ふんまんやるかたない様子で槍を地面に叩きつけた。ポイントは4対0でアリストが絶対的に有利である。黒騎士の方は3回目の打ち合い棄権するか？

黒騎士が勝つには、アリストを落馬させるか、気絶させるしかない。くしくも、準決勝1回戦の俺と同じ状況だ。どうやら黒騎士は一縷いちろうの望みをかけて戦場に立つらしい。みなぎる闘志で槍を突き上げ観客にアピールすると、同時に降りおろされた主審の合図で走り

出す。

三度^{みたび}二人の騎士が激突する。

——バギーン！！

響く激突音。黒騎士の槍はアリストの胸を捉え、アリストの槍は黒騎士の顔面を捉えた。アリストは盾で防いだにもかかわらず大きく仰^のけ反^そる。しかし、馬上^{ジョスト}槍の試合において、後方へ落馬することはほとんどないのだ。馬の鞍^{くら}には10センチ程度の背もたれが付いており、よつぽどのがなければ倒れることはない。

アリストは槍を掲げて観客に勝利のアピールをする。観客の歓声は否が応にも高まり、会場を染め上げた。

『馬術の腕も、バランス感覚も、そして槍さばきも、超一流じゃな。しかし、お主と戦うには相性が悪いじゃろうな。勝ちはお動かんと思うが、油断するでないぞ』

いつの間にか現れていたジーニアス卿が呟く。傲慢に思うかもしれないが、俺も同じく勝利を疑うことはなかった。

フラウワ王国の北西に位置するベリアル領。豊かな自然に囲まれ、平地が多いことから作物も育てやすく、領主も良識があるおかげで安全と豊かさを両立した素晴らしい領地だ。

ベリアル家は、フラウワ王国の2代目国王がその姓を国名と同じフラウワに変えたときに、同じくしてベリアルと名を変えており、

元の名は、それだけで素性が分かってしまつほどに有名な名門の貴族であつた。

ベリアル家の歴史は古く長い。その中でも同族の多大な功績のおこぼれに預かつて得たベリアル家の領地は、広くはないが非常に豊かで、税収も多く貴族の中でも大変な資産を持っていた。

また、ベリアル家の現当主であるアリストの父は、経済や商売において優秀であり、戦のない今の時代では資産の面でも他の貴族より優位に立っている。

アリストは幼少の頃から、騎士王ジーニアスローバーンの物語を聞いて育つた。当然将来は騎士になると決めていた。彼の父は経済を学ばせたがったが、本人が望まぬ限り、本当に必要な知恵というのは身に付かない。

アリストは小柄で、身軽、そして器用な少年だった。木登りなどはすぐ得意だったし、乗馬なども騎士への憧れもあつて熱心に練習したため、みるみる上達した。

10歳になると、子供用に軽くした槍を使って馬上槍の練習にも取りかかった。最初はうまくいかなかったが、生来の努力家なところもあつて馬上槍の腕はどんどん上達し、一年後には的を外すこともなくなつた。

12歳で騎士を目指し、父の知り合いの騎士の従者となり、15歳で騎士試験に合格した。

そして、初めての騎士大会。ナイト・オブ・シヴァリー念願の舞台について到達したアリストだったが、大会で使用する槍を持ったとき、がくぜん愕然とした。

——重すぎる。

いままで自分が練習していた槍はなんだったのか、そう思えるほど、重さが違った。

アリストは残念ながら体格は小柄で細いままだった。馬術も槍術も他を寄せ付けぬほどの技量を持つのに、力だけが足りなかった。何とか訓練し、試合用の槍を使えるように努力した。

試合用の槍も扱えるようになったが、精々一試合くらいで、トーナメントで勝ち抜くなど、夢のまた夢だ、しかし、アリストは試合に出ることを諦められず、試合に出場する。しかし、結果は予選二回戦敗退。

それでもアリストは諦められず、来年までに槍を使えるようになればいいと猛練習をしたが、それが元で怪我をし、騎士2年目の大会の三ヶ月 前まで槍を握ることもできなかった。

アリストの努力を知っている従者は、主を不憫に思い1つの過ちを犯した。

特注で作らせた改造槍。

槍の中心部を空洞にした槍をつくり、普段はそこに水を入れて重さを試合用の槍と同じにし、検査を通った後は、中の水を抜くことで軽量化できるというものである。

従者はアリストが馬上槍の試合で優勝できるなどと思っていたなかった。ただ一試合でも多く試合を楽しめるようにと、軽い改造槍を

作って渡したのだ。

しかし、練習用より重いとは言え、今までの試合用よりかなり軽い。その槍を手にいれたことで、アリストの本来の実力が発揮された。

正確無比に敵の顔面を射抜く槍と、顔を狙った相手の槍を頭をひねったり、上半身をそらせて避けるその軽業は観客を魅了した。

圧倒的な技量とアクロバティックな動きで優勝をさらったアリストに一部の騎士から疑問の声が上がった。重い槍を持ってあんな動きができる訳がないと。

それを受けてアリストは、後日王の前で特別試合を組まれた。その試合でアリストは、きちんと試合用の槍を使って勝利した。

なぜ試合用の重い槍で勝てたのか。理由は簡単だ。

たったの一試合だったからだ。トーナメントでは連戦になるため耐え切れない彼の筋力も、たった一試合なら重い槍にも十分に耐えられる。こうして彼は一部の騎士を黙らせることにも成功した。それでもまだ声をあげる者もいたが、將軍の例の一言が飛び出し、騎士達を黙らせた。

『負けたやつが何を言っても言い訳』

周りの者の喜ぶ顔、観客達の熱狂的な歓声、そして將軍の言葉によってアリストは自分の行為を正当化してしまった。

そして、またしても軽量化された改造槍で挑む今回の大会。しか

しアリストは油断しない。予選から試合をつぶさに観察し、本戦まで残りそうな選手を徹底的に調べた。その中にレオンがいた。

アリストはレオンがどのような技を使っているかすぐにわかった。相手の脇腹を突いている。ただそれだけだ。言葉にすると簡単だが、それにはとてつもない技術が伴うこともアリストには分かっていた。一朝一夕にできる技ではない。恐らく数年もかけて磨きあげてきた技なのであろうとアリストは推察した。

しかしアリストは、その技の対処方も見抜いていた。事実、準決勝のスカルスそれに気づいていたに違いない。

馬の背に乗った状態で、脇から突かれれば普通は横に倒れるだろう。さらに馬上槍の試合では、脇腹を突かれるなどと考えていないため、不意を突かれバランスを崩してしまうということだ。

対処法としては、まず巧みな馬術とバランス感覚。そして、突かれても耐えられる体格たいかく。それが揃っていたなら、落馬の可能性を大幅に減らすことができる。

アリストには、前の二つの条件は備わっていたが、最後の一つ、体格については全くと言っていいほど当てはまらない。体の線が細く、小柄なアリストは横から突かれれば簡単に落馬してしまうだろう。スカルスとの試合のように、側頭部を狙ってくれば避けようがあるが、胴を狙われたら避けることができない。レオンはアリストにとって最悪の相性なのだ。

そこで彼はまた一つ過ちを犯す。

「なるべくなら使いたくないが・・・」

アリストはソレを見つめて呟いた。

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章第1

誤字脱字、御注進等承っております。

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章 第1

いつも読んでくださり、ありがとうございます！

決勝戦前日、俺はいつも登城するのと同じ時間に目が覚めた。二度寝という当然の選択をすべく布団に潜ったが、すっかり目が冴えてしまつて眠れなくなつてしまったため、諦めて起きる。

起き抜けの体をうんと伸ばす。体の節々が筋肉痛やら打撲やらで痛い。まあ、この1週間一日おきとは言え何戦も試合を行なっているんだから当たり前か。

着替えるために服を脱ぐと、左の肩や腕、胸の辺りにも痣^{あざ}が見える。鎧越しとはいえ馬で加速した槍の攻撃を受けているのだから仕方ない。しかも、俺の『幻槍^{ファントム・スピア}』は攻撃のタイミングの問題で、相手の攻撃を受けたあとでなければ当てられない。必然的にダメージも多くなる。

でも、それでも戦えるのは、剣術の訓練の時に盾を構えてひたすら敵に体当たりをするという馬鹿げた訓練のおかげで体が丈夫になったり、ダメージに強くなったのかもしれない。ジーニアス卿様々だな。

俺は平服に着替えると、軽く体をほぐしながら1階の食卓に移動し朝食を食べる。食後は紅茶を飲みながら偉人伝を読む。最近はずっかり本を読むクセも付いた。

それから、昼前になったころ、ようやく外に出かける。家でのんびりしてもいいのだが、家にいても特に面白いことはない。今は騎士^{ナイト}・オブ・シヴァ^{オブ・シヴァ}の人口は増え、露天などもたくさん出ていて見て歩くだけでも楽しい。

俺は、特に露天が集中している中央広場の公園で露店を冷やかしながらのんびりと歩く。まあ、のんびりといっても、祭り状態で人が溢れているため、静かで落ち着くという感じではないが。

昼は屋台の料理で空腹を満たすと、俺はある場所に足を向ける。足取りは軽く、心はウキウキ。顔はニヤニヤだ。

そう、神殿さ！

俺の女神に愛に・・・もとい会いに行くんだ！ あゝ、テンション上がるな！ フローラさんの顔が見られるだけで疲れも吹っ飛んじゃうぜ！

俺は意気揚々と歩くと、フラウ神殿に乗り込んだ。

観光客も多いのか、神殿はいつもにも増して込み合っている。神殿内のあちこちで札や聖華が売られている。札や聖華は不幸から身を守ったり、身代わりになってくれると言われており、また持っている、健康に恵まれたり幸運を得やすくなると言われている。

しかし、フローラさんいないな。どこだろ？ 俺はキョロキョロしながら辺りを見回す。

「レオンハウト様！」

もう、声でわかるよ。

「昨日の試合も見ましたよ！ 素晴らしい逆転劇でしたね」

・・・門番。

フローラさんでは無かったためガツカリしていたが、表情には出さないようにし（なるべく）笑顔で答える。

「ああ、ありがとう。みんなの応援に助けられたよ」

「いやあ、本当にすごかったですよ！ 私はあのスカルス選手がゆつつつくりと落馬した時はほんとに鳥肌が立ちましたよ！ しかも、あれが、あれで、準決勝第2試合も・・・」

馬上槍試合^{ジョスト}大好きの門番氏に捕まって、延々ミーハーな話を聞かされたが、もちろん俺は上の空で視線はフローラさんを探していた。一人で熱くしゃべっていた門番氏も、俺の様子がおかしいことに気づいたらしい。

「・・・レオンハウト様？ ——！ ああ、女神様をお探しですね？」

女神様って、神像の位置くらいわかるわっ！ と思っただが、にやりとした笑いを浮かべた門番氏の顔を見て、どうやら女神「フローラさん」という意味らしいことは察しがついた。というか、なんで俺がフローラさん目当てだと気づいたんだ！？

「フローラ様は、王都からいらっしゃったご家族の方にお会いになっているそうですよ」

がーんっ。フローラさんは居ないのか。俺が内心ガツクリしていると、門番氏はふと思ひ出したように言った。

「そういえば、さつき司祭様から聞いたんですが。昨日フローラ様は何度も何度も、フラウ様の像に熱心にお祈りを捧げていたらしいですよ。誰のための、何のお祈りだったんでしょうねえ」

ニヤニヤ笑って言った訳知り顔の門番氏。その話を聞いて、俺の顔もニヤニヤになってしまふ。俺はなんとか歯を食いしばってニヤケそうになるのをこらえ（たつもり）、門番氏に言った。

「な、なんのことかわからないが。そうか、フローラさんは熱心に何度も祈っていたのか。ソウナノカア」

少しきこちない返答だったかな。まあいいや。

「では、私は明日も試合があるから、帰って体を休めるとしよう」
門番氏にそう告げて歩きだした俺の背に、門番氏の声がかかる。

「ご神像にお祈りはしていかなくてもいいんですか？」

言われて俺は、慌てて神殿奥の神像を目指す。門番氏は声を上げて笑っていた。

夕方、日も暮れてきたが町には明かりが灯され、夜の闇を明るく照らしている。そんな夜道を歩く俺の隣には、シャレた茶色のスーツに帽子とステッキという姿のジーニアス卿の姿。

『明日はいよいよ決勝じゃな。緊張しとるか？』

「緊張ですか？ 試合前はいつもしてますよ」

俺は気分がゆったりしているため、笑って答える。

『ふむ、思ったよりリラックスしているようじゃな』

ジーニアス卿は俺の顔をみて満足そうに頷く。

「しかし、本当に夢みたいですよ。まさか俺が、ジョスト馬上槍試合の決勝戦に出るなんて」

『確かに、ほんとうじゃな』

言ってジーニアス卿はワハハと笑う。嘘でもいいから、もつとなんか言うことあるでしょ！？ お前を初めて見た時から天才だと思ってたとかさ。

『しかし、ワシは初めてお主を見た時から分かっておった』

えっ、まさか本当に言うの？

『お主は完全な凡人だと』

「えっ、なんですかソレ！！」

その流れおかしいでしょ！ さすがの俺もその展開は予想してなかったよ。

『当たり前じゃろ。もし本当の天才ならあんな情けないことで悩んではないじゃろっからな』

グウの音でもません。

『しかし、だからこそ分かっていた。・・・やればできるとな。そして、お主はワシの言った通りのことを文句も言わず・・・文句と泣き言を言いながらも、なんとか、ギリギリ、やり続けた』

そこまで言わなくても。確かに文句も泣き言も言っただけども。

『結果はこの通りじゃ。レオンよ。これで分かったのではないか。時間をかけ、正当な努力をすれば、どんなことも必ず達成できると』

俺は黙って頷く。確かにそうだ。正当な、正しい努力。闇雲に練習するのではなく、馬上槍の《試合》に勝つために、ルールに則った上で、卑怯なことをせず、そのために必要なことに力を注げば目標を達成できる。そして、それは思った以上に早くだ。

『もちろん勝利は時の運もある。明日の試合、ワシから見れば8割方お主の勝利だが、油断するでないぞ』

『はい、最後まで抜かりなく全力を尽くします！』

『うむ、よろしい。・・・思えば、全ては明日のためであつたのかもしれん』

ジーニアス卿は、後半は小さな声で呟いた。

「ところでジーニアス卿。その、目標達成のための正当な努力の件なのですが、例えばの話なのですが、好きな女性のハートを射止めるにはどのようにしたら良いでしょうか！」

俺はずいといとジーニアス卿に顔を寄せる。すると、ジーニアス卿は呆れた顔をする。

『まったく、お主という男は・・・あの修道女か？』

「いや、あの、例えばの話ですよ。例えばの・・・」

『——まあ良い。あの修道女のハートを射止める方法じゃが、すごくいい方法を教えてやろう』

「なんですか!？」

『うむ。・・・当たって砕けるじゃ!』

でた! 精神論(幽霊だけに)

「ジーニアス卿。砕けちゃダメでしょ」

さすがの俺もかなり冷たい目でジーニアス卿を見てやりましたよ。しかし、ジーニアス卿はまったく気にならない様子で続けた。

『当たって砕けるでいいんじゃないよ。準備万端やることをやって、全力で当たれば』

ジーニアス卿が足を止めてこちらを見る。

『——砕けるのは相手の方じゃ』

カッコイイ!! えっ、なにそのセリフ! すごくカッコイイ。

全力で当たれば、砕けるのは相手の方かつ！

「ジーニアス卿、わかりました。俺は、全力でフローラさんの心の壁を粉碎してやりますともっ！」

テンションが上がった俺が拳を突き上げ宣言すると、ジーニアス卿はわずかに呆れた顔をしたあと、ふと笑みを見せる。

『まったくお主は。自分のことはワタシかワタクシと言えと何度も言っておるだろうに。仕方のない奴じゃ』

言われた俺はごまかす様に笑う。ジーニアス卿はそれを見てさらに笑みを深くする。

よし、何はともあれ、まずは明日の決勝戦を勝利するぞ！

次回はついに決勝戦の始まり。アリストに対して有効と思われる『ファントム・スピア幻槍』。しかしアリストにも『アレ』という切り札が、、、、どうなるレオン！

次回のタイトルは『レオン、一発で簡単に決着がついちゃいました』の巻です！

予想のつかぬ展開ですが、ご期待下さい。

上記の予告はジョークです。

あと、感想いただきました！

本当にありがとうございます！

引き続き、誤字脱字、ご意見ご感想ございましたら、首を長くしてお待ちしております！

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章 第1

毎度ありがとうございます！

決勝戦当日。青く澄み渡る空には雲ひとつなく、太陽は穏やかに大地を照らしている。これだけ天気がよければ、会場にどれだけの人が来るのか想像もつかない。

睡眠もバツチリ、朝食も消化に良いものをほどよく食べて、俺は家を出る。自分でも不思議なくらい緊張していなかった。

大通りを一路ローバーン城へ向かう。登城する時はいつもこの道だったが、今日は景色も違って見える。

道は太陽の光を反射して輝き、建物もどこか明るい。空気も澄んでいるように思える。通りは騎士大会最後の日と言うこともあって、とても盛り上がっていて、いつも以上に活気がある。しかし、一番違っているのは街の様子ではなく、俺の気持ちなんだと思う。

この道を、いつも俺は仕事に行きたくないと重い足取りで歩き、行き交う人々を疎ま^{うと}しげに見ていた気がする。だが、今日の俺は違う。堂々と胸を張り、顔には笑みを浮かべて歩いている。この道はまるで栄光への道であるかのように、輝きの中を闊歩^{かつぽ}しているのだ。

馬上槍の鎧を身に付けていない俺は平凡な男に過ぎないため、誰も俺に気づく様子はない。しかし、今の俺は間違はなくダリアーの有名なだろう。俺はこんなに自信に満ち溢れていつもの道を歩くことになるとは、思ってもみなかった。

街の、人々の輝きを見つつ歩けば、あっという間に城に着く。試合前に控え室に行くと、従者の者が鎧などを準備して待っている。

相変わらず、騎士に貸し出される支給品の使い古した鎧だ。決勝には新しい鎧をといた提案もあったのだが、今更変えて感覚が違うなんてことになったら笑えない。俺はその申し出を丁重にお断りした。

使い古しの鎧だが、手入れは万全にされており、錆び落としもして、さらにツヤ出してくれたらしく、見栄えもいくらかマシになっている。

決勝では、ソレイユ騎士団の団長より騎士団のカラーである黄色の布を巻くようにと命令が下されたため、鎧の右肩に邪魔にならない程度の黄色のスカーフが巻かれている。

試合の時間まで控え室で待っていると、大会の委員の者がやってきた。

大会の委員会の者曰く、今回決勝戦では王都より二人の王子が来ているため、失礼のないよう立派な騎士として振舞えとのこと。

この国に王子は二人しか居ない。長男の小太りおかつぱ頭のジュリアス王子。確か20代半ばだったような。もう一人は俺と同年の弟の女顔の美男子ユリアス王子に決まっている。

ユリアス王子とは従者の試験の時に顔を合わせている。当時ユリアス王子は身分を隠して従者をやっていたが、配属先の騎士の気の使いようや、指導教官の態度からすぐに王子とバレていた。当時はやや可愛い感じの顔立ちだが、数年前に見たときはカッコイイ男になっていた。当時は顔はいいが頭はあまりよくない。というか自分の考えが全くないという感じで、よくいえば素直という感じであった。今は変わっているかもしれないが。

俺はもともと上司相手に下手に出たり、ご機嫌とつたりするのが苦手なタイプで、結構普通に接してしまうところがある。挨拶するときは気をつけようと心の中でつぶやいた。

そうこうしている間に、試合の時間が迫り、会場へ向かうよう指示された。控え室から出ると、そこに栗毛の馬が待っていた。大会の間借りており、今やすっかり仲良くなった馬だ。余談だが、この馬を選んでくれたのは乗馬場の管理を代行しているトーマス少年である。この馬がいい馬で、トーマス少年は若いながら馬を見る目は確かなようだ。

俺はよろしくなと馬の頭を撫でてその背に飛び乗る。従者と大会の係員に導かれて試合会場に向かうと、会場から数百メートルにも及ぶ行列ができていた。その行列は2列になっており、その真ん中を俺が通る。

左右から、『レオン様あ！』と次々に声が上がる。どうやら会場に入れなかった人達が、俺をひと目見ようと列をなして待っていてくれたらしい。俺がにこやかに手を振ると、あちらこちらで歓声上がる。そして、誰が言い出したのか、

『ファントム』『ファントム』

とリズム良く声援が飛ぶ。『ファントム』の大合唱の中、長い時間をかけて会場に入ると、会場内からひととき大きな歓声が上がった。その一角は、色とりどりのローブをまとって『亡霊』のコスプレをした俺のファンの姿。俺陣営の間近には2、300人以上のローブ姿の者達が占拠していた。

続いて、アリストが入場して来る。アリストのファンもそうとう

多い。俺の時に勝るような歓声が会場に響きわたる。彼のアクロバティックな軽業や正確無比な槍さばきは、やはり人を魅了しているらしい。

俺達は指示に従い中央へ向かう。間近で見たアリストの顔には見覚えがあった。サラサラの金髪。少年の面影が残る顔立ち。一人したばかり（15歳）と言っても通じるだろう。アリストは俺を見るとにっこり微笑んだ。

俺達は馬から降りて貴賓席に礼をした。主審も貴賓席に礼をする。その視線の先には、一おかつぱ頭の小太り男（ジュリアス王子）と頭空^{ユリアス}つぱの美男子の姿があった。

「ジュリアス王子殿下、ユリアス王子殿下。ご機嫌麗しゅうございます。本日は馬上槍試合^{ジョスト}をご観覧いただき誠にありがとうございます。今から、私の隣におります正問官（司会者）が選手のご紹介をさせていただきます」

そう言つと、主審は恭しく、見事な礼をして、自ら一步下がった。入れ替わるように現れた若い男は、顔の右半分^{やうひやう}に白い仮面を付けていた。彼は道化師の様に両手を広げおおげさな礼をして見せると、胸を張って語り出した。

「さてさて皆様。騎士大会も最終日となつてしまいました。しかし、悲しむことなかれ。これからワタシ達は、最後にして最大のイベントである馬上槍試合^{ジョスト}の決勝戦を目にすることが出来るのですから！」

よく通る凛々しい声と、役者のように身振り手振りを交えるその動きが観客の意識を声問官に向けさせる。

「かつて・・・このような騎士がいたでしょうか！ 無名でありながら、歴戦の強者達を次々に打ち破り、ついに決勝までやってまいりました。しかも！ すべての試合を相手の落馬で勝利し・・・否、すべての試合で相手を落馬させて！ たった一本の槍を片手にここまで登り詰めた男！
ファントム・スピア『幻槍』レオンハウト・フォレスター！！！」

- - - - -ワアアアアアアア！！

歓声が沸き起こる。俺は歓声に応じるように拳を突き上げた。

『ファントム、ファントム！』

もはや聞きなれたファントム・コールが起きる。

一声問官（司会者）は、会場の熱が下がるの待って、今度はアリストの紹介に移る。

「圧倒的实力で優勝をさらった前大会から一年。またも決勝に姿を現した若き騎士。異常なまでの身軽さと、針の先さえ射抜く槍の技。なぜこんなにも強いのか。その秘密がついに暴かれました！」

芝居がかった声問官の発言に会場が騒がしくなる。アリストは去年反則の疑いがかけられていただけに、誰もが反則が暴かれたのではないかと疑った。その混乱が観客に浸透するのを待って一声問官（司会者）は口を開いた。

「アリスト・R・ベリアル。何と彼は、騎士王ジーニアス・ローバーンと同じ血が流れているのです！」

—— なっ！？なんだって？

頭が真っ白になる。ありえない。意味がわからない。戸惑う俺を尻目に、一声問官（司会者）の説明は続く。

「アリスト選手のミドルネームのRはローバーンのR。騎士王ジーニアス・ローバーンの遠い親戚の子孫であることが発覚したのです！　そう考えれば、彼の異常な強さも説明がつきます！　馬上槍の名手であるジーニアス王と同じ血を引く者。騎士大会の馬上槍試合、前人未到の2連覇なるか！アリスト・ローバーン・ベリアル！」

一声問官（司会者）の紹介が終わると、会場は熱狂に包まれた。民衆はいつも、伝説的な物語が大好きなのだ。特にこの街は、ローバーン王の住んでいた前王都ダリアなのだから。

騎士王の再来と、『ファントム・スピア亡霊の槍』使いじゃ、こっちが完全に悪役じゃないか！

俺は下らないことを考え自分を誤魔化していたが、実を言うと足元が崩れ落ちるような不安でいっぱいだった。

もしかしたら、俺はアリストの噛ませ犬だったのかもしれない。

ジーニアス卿は、自分の同族を華々しく輝かせるために、俺を用意したんじゃないだろうか。戦った者を皆落馬させてしまう不可思議な技を使って勝ち進む名もない騎士。

誰もが立ち向かうこともできずに敗北。そのまま優勝かと思われたところに現れるアリスト。アリストがその敵（俺）を完膚なきま

でに倒して名を上げる。そんな計画だったのではないか。

『ファントム・スピア幻槍』はジーニアス卿に教えてもらった技だ。逆に言えば、ジーニアス卿なら『ファントム・スピア幻槍』の弱点を知っているかもしれない。

そんな考えが俺の頭の中を駆け巡った。呆然としていた俺は、一声問官（司会者）の指示に機械的にしたがって、アリストに礼をし自陣に戻る。

自陣に戻ると、沈痛な顔をしたジーニアス卿が待っていた。あれではまるで自分の非を認めているみたいじゃないか。

『レオンよ。突然のことに動揺しているかも知れぬが、今は全て忘れて勝つことだけに集中せよ』

なんだって！ 理由の説明も無くよくそんなことが言える。俺は怒りを顔おもてにしてジーニアス卿を睨みつけた。聞きたいことは山のようにあつたが、時間がそれを許さない。1回目の打ち合いの時が迫っていた。従者の少年は槍を俺に差し出しながら笑顔で、頑張ってくださいと応援してくれる。

俺はなんとか引きつった顔で、ありがとと答えると敵陣の方へ馬主を巡めぐらせる。

はるか遠くに見える黒馬に乗った青鎧の騎士。

俺は動揺を隠せぬまま、1度目の打ち合いに挑んだ。

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章第1

次回はついに決勝戦！

気合を入れて書きたいと思います。

ご意見ご感想、お待ちしております♪

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章第2

いつもありがとうございます！

レオンは混乱していた。

決勝戦の対戦相手であるアリストが、ジーニアス卿と同じ血を引くものであったという事実、レオン強い衝撃を感じ、頭の中が真っ白になった。

レオンには、ジーニアス卿に騙されていたのではないかと思う一方で、ジーニアス卿を信じたい気持ちもあった。そのせめぎ合いが頭の中で巻き起こり思考停止状態に陥ったレオンは、審判の『始めッ！』の声も聞こえず、試合開始の合図である旗が振りおろされたのを見て、反射的に馬を駆けさせた。

呆然自失のレオンだったが、鍛えられたその体は、その技は、レオンを裏切らなかつた。馬は相手とスピードを合せ、体は槍の標準を絞って槍を固定する。

何十、何百と繰返した動きは、そこに大会での実戦経験が加わり、体に染み込んでいた。

レオンがぼんやりとしている間に相手との距離はぐんぐん縮まっていく。

アリストの槍は、狙い違わずレオンの頭部を狙っていたが、槍が届くほど接近したとき、槍先が戸惑うように揺れた。

（――避けられる）

ぼんやりとした頭でレオンは理解した。顔をわずかに傾けると、
槍は頬をこするように背後に抜けた。

思考停止状態のレオンはある意味自然体に近いようで、青き鎧の
騎士に向かって体は自然に動く。

『ファントム・スレア
幻槍』

気づいた時には、レオンの体は使い慣れた技を繰り出していた。

鈍く光る銀鎧の騎士。

相手の顔が視認できるほど近づいたそのとき、アリストはぞつと
するような嫌な気配を感じた。レオンから感じる恐ろしいプレッシ
ヤー。例えるなら、死神の鎌を突きつけられるような感覚とでも言
おうか。

アリストは直観にしたがって、馬の足を早めた。

——ギョオッ！

アリストの繰り出した高速の突きを、わずかに顔を傾けてかわす
レオン。

（バカなッ！？見えているのか）

その瞬間、アリストの脇腹から腰にかけて撫でるように駆け抜け
た槍。それだけでアリストはバランスを崩し、危うく落馬しそうに

なつた。

直観で馬足を早めた一瞬の差がアリストを救った。

（なんて恐ろしい技だ。他の連中とは違って、僕は槍が脇腹にくると知っていたのに、危うく落馬させられる所だった）

アリストの背を嫌な汗がじつとりと濡らす。

二百メートルの距離を駆け抜け、自陣に戻ったアリストに、長年手を貸してくれている老従者が駆け寄ってくる。

「アリスト様。いかがでしたか？」

端からみたら、何が起きたかわかっていないのだろうが、心配そうな顔をした老従者は百発百中の槍の技をもつアリストが、珍しく攻撃を外したことにただならぬものを感じていたのかもしれない。

「・・・危うく落とされる所だった」

老従者は驚いた顔。

「なんとっ！？確かに、すれ違ったあとバランスを崩されたようには見受けられましたが、まさかそれほどまでに強いとは・・・」

——ワアアアアアアアアア！！

熱狂的な歓声が響く。得点が記されていた。

レオンにポイントが入っていた。レオンの槍の穂先はアリストに掠って割れたということだ。

得点板をしばらく眺めたアリストはふうとながくため息を吐いた。

「爺^{じい}、アレを用意してくれ」

「——かしこまりました」

老従者はアリストの要請にかすかに迷いを見せたが、結局は頭^{くち}を垂れた。もはや戻れぬところまできている。老従者は新たな罪を犯した。それは忠実であるが故の、あるいは主人を大切に思うが故の過ち。

「アリスト様、くれぐれも頭は」

「わかっているッ！」

アリストは忠臣の助言を（いや本当は懇願といってもよかったが）うるさげに遮ると、槍をひったくるようにして受け取った。

今回は書くのが難しかった。

区切りを迷った結果、短くなってしまいました。

誤字脱字、ご意見ご感想等ございましたら、是非ともお聞かせください！

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章第2

いつもありがとうございます。

一度目の打ち合いを終えて、俺は自陣へと戻る。アリストに繰り出した『幻槍』フアントム・スピアに手応えはあった。落馬させるには至らなかったが、槍先は割れポイントはリードしている。

自陣では、ジーニアス卿が腕組みをして待っていた。その表情は決然としており、戸惑いや後ろめたさなど無く堂々としている。

『レオンよ。見事であつた。さっきの攻撃で分かつたと思うが、当てることができれば間違いなく勝つことができる。臆せず槍を振るうが良い』

俺もそれは感じていた。当てれば倒せる。つまり俺という存在は、ジーニアス卿がアリストのために用意した噛ませ犬ではないということだ。そのことがわかつて胸がスツと軽くなった。

「・・・ジーニアス卿。信じてもいいんですね？」

俺はジーニアス卿の目をまっすぐに見て言った。ジーニアス卿は目をそらさず答えてくれた。

『当たり前じゃ！ レオンよ。勝ってこい！』

「はいっ！」

俺は答えて馬首を巡らせる。丁度、主審が旗を振り上げた。2度目の打ち合いが始まる。集中力が研ぎ澄まされる。

――絶対勝つ！

「アンガルド
構えッ！」

俺は槍を構える。目線は遙か彼方の青騎士。じりじりと体の中から力が溢れてくる。それは、俺からジーニアス卿への信頼と、ジーニアス卿からの俺への信頼によって生まれた力。俺は力がみなぎり、今か今かと主審の合図を待つ。それはまるで、鎖でつながれた獣が解き放たれるのを待つように。

「アレ
始めえッ！」

主審の合図と共に、馬を駆る。左手は轡たすなを強く握る。膝を締めて体を固定する。上半身は緩やかに振動に任せる。槍は脇に挟み狙いをつけ続ける。

青き鎧をまとったアリストが猛然と馬を駆けさせてくる。速いスピードで『ファントム・スピア幻槍』をかわすつもりかもしれない。

こちらはスピードを緩めてタイミングを調節する。そのとき俺はふと違和感を覚えた。アリストの構えが先ほどと何か違う。この違和感は何なんだ？

そんなことを考えている間にもアリストはグングン迫ってきた。アリストの槍先が俺の胴体を射抜かんと迫る。

・・・胴体を？

そうか、あいつの槍は俺の顔面を狙わず胴体を狙っているんだ。だからさっきと違う感じがしたんだ。胴体への攻撃なら、槍の一撃

を食らっても、確実に『ファントム・スピア幻槍』を繰り出せる。顔面に槍を当てられると、視界が塞がって槍を命中させる難易度は上がってしまう。しかし、胴体への攻撃なら、視界も塞がらず、衝撃も顔面にもらうより少ない。

よし、確実にこの一撃で決める。まずは相手の一撃を盾で防いで・

俺は防御のため盾を軽く引き上げると同時に、『ファントム・スピア幻槍』を放つため集中力を高める。

接近！

歯を食いしばって衝撃に備える。

——ゴワンッ！

炸裂する衝撃。いまだかつて味わったこともないような衝撃が体をぶち抜いた。城門を壊す破城鎚を体に食らったような、そんな凄まじい一撃だ。

呼吸が苦しい。体中を雷のような激痛が走り抜ける。盾越しの一撃とは到底思えない。

今すぐ馬から飛び降りて、地面を転がり回りたい。

しかし、現実的には痛みで体がこわばり、身動きひとつでできなかった。そのまま敵陣を駆け抜ける。一瞬アリストに仕える老従者を視線の端に捉えた。はし

老従者は痛ましい顔つきで俺を見ていた。

ポイントは1対0のまま、俺がリードしている。アリストの槍先は割れなかったのか？あんなに凄まじい一撃にもかかわらず、陶器で出来た槍先が砕けないのはおかしすぎる。

自陣に戻るために馬を操ろうとして気づいた。左腕が動かない。先程までは全身に迸るように走っていた痛みが、左腕の付け根に集中している。

——クソッ！

俺はこの激痛が、そしてアリストの攻撃があまりに不可解で思わず悪態をついた。あくたい

自陣に戻ると、ジーニアス卿は困惑したような、それでいて怒っているような、そんな表情で俺を迎えた。

『レオンよ。大丈夫か？』

「ええ、大丈夫ですよ。ちょっと左腕が動かないだけですから」

俺は、ジーニアス卿の問いに無理やり笑みを浮かべて見せる。

『・・・いまお主が敵方の不正を訴えれば、間違えなく相手の反則を証明できるぞ』

ジーニアス卿は苦い顔のまま言った。

「ジーニアス卿は、それを望んでいないでしょう？」

俺は何となく気づいた。ジーニアス卿は恐らく、アリストの過ちを正したいと思っ^{あやま}ているんだろう。誤った方法で勝ち続けることはできないと、伝えたいんじゃないかと思った。

『むっ、すまん』

俺の考えてることを察したのかもしれない。たった3ヶ月だけど、お互いの考えてることがわかるようになった。

「すみません。盾を外して次の打ち合いをしてもいいですか？」

俺は審判に声をかけた。審判は少し悩んでいたが、

「過去には盾を用いず戦った例もある。問題ないだろう」

と許可をくれた。俺は従者の少年に手伝ってもらい左腕に取り付けられている盾を外した。外すとき激痛が走ったが、盾が外れると左腕は軽くなり、大分楽になった。改めて馬の轡^{たすな}を握ると、左腕の付け根に痛みが走り、俺は顔をしかめた。

『レオン。無理をせずとも良いのだぞ』

痛みで顔をしかめた俺を見て、ジーニアス卿が心配そうな顔で俺を見た。こんな顔を見るのは、予選一回戦の時以来だ。

「ジーニアス卿、大丈夫ですよ。『当たって砕ける。全力で当たれば、砕けるのは相手の方だ』……でしょ？」

言って俺は笑う。

『ふつ、最後は結局精神論か?』

ジーニアス卿は頬を緩めて言った。

「ええ、『人間は精神、つまり魂で生きてる』らしいですからね」

二人が昔したやりとりを、立場を変えて言ってみた。ジーニアス卿も意外とノリがいい。

『レオン。もはやワシは何も言わん。ただ勝て!』

「ハハッ、何も言わんで、言ってるじゃないですか。・・・もちろん、勝つてきますよ!」

言つと俺はジーニアス卿に背を向け、彼方に見える青騎士へと視線を移した。

「構えっ!
アンガルド」

主審の声が聞こえる。俺は槍を持ち上げ構えた。ほんの少し体を動かしても、左腕に痛みが走る。だが、あと一合いちごうだけでもいい。どちらにせよ、それ以上は無理だ。痛みに体がもたない。

「始めえっ!! (アレ)」

主審の合図と共に、大波乱の騎士大会の馬上槍試合、最後の戦いの幕が切つて落とされた。

ナイツ・オブ・シヴァリッシュ

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章第2

誤字脱字、ご忠告、感想等あれば是非ともおしえてください!!

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章第2

いつも読んでいただき、ありがとうございます！

2度目の打ち合いを終えて自陣に戻ったアリストは、腕に走る痛みに顔をしかめた。槍を老従者に渡すと手をほぐす。

「アリスト様、大丈夫ですか？」

心配そうに聞く老従者に、アリストは淡々とした様子で答える。

「問題ない。ただ、衝撃がすごいな。手がしびれたよ」

アリストが2度目の打ち合いで使用した槍の先は、陶器といっても異常に頑丈に出来ていて、鉄と打ち合わせても割れないという謳^{うた}い文句のシロモノだ。見た目も重さも普通の陶器と変わらないため、こっそり持ち込んできたものだ。

しかし、ただ割れないだけでは反則を疑われたときにまずい。ところが、この陶器は水で濡らすとたんに脆^{もろ}くなる。なので、疑われたときには、ちよつと水をかければ簡単にただの割れやすい陶器に早変わりというわけだ。

突いたアリストも、今だかつて味わったことのない衝撃を受けたため、恐らくレオンは負傷しているだろうと考え、アリストは勝利を確信していた。負傷による棄権を宣言するか、反則だとわめきたてるかはわからないが、それまでの間馬から降りて体を休めようとしたアリストの耳に、驚くべき言葉が聞こえてきた。

「ん？ アリスト選手棄権するのか」

それは自陣側にいた審判の声。まさか、棄権するなどありえない。そもそも勝利が確定しているのになぜ棄権せねばならないのか。

「棄権なんてしませんよ。相手の準備が整うまで、馬から降りて休もうと思っただけですが？」

アリストがすました顔で言うと、審判は不審な顔をしていった。

「だったら早く準備をしたまえ。相手は君が準備を整えるのを待っているぞ！」

言われたアリストは目を見開いてレオン陣営を見た。はるか遠くに、鈍い銀色の鎧に身を包んだ騎士が、騎乗した状態で待っていた。

（バカなッ！ あの手ごたえの攻撃を受けて戦えるわけがない！！ 思ったよりダメージが少なかったのか？ いや、そんなことはあり得ない。僕は今でも腕がしびれてるんだぞ）

アリストは愕然とした様子でレオンを見ていたが、突然その表情が一変する。

憎悪。狂おしいまでの怒り。

アリスト自身は気付いていなかったが、規定より軽い改造槍を使うことと、割れない槍先を使うことは本質的な違いがあった。前者はあくまでアリストの技術があつたうえで効果のあるもので実力がなければ意味がないのだ。しかし、後者の割れない槍先は違う。ただの武器だ。誰が使っても同じ効果を発揮するもの。それを使うことが意味するのはただ一つ。

『實力ではかなわない』と認めているのと同じだった。

アリストは頭では理解していなかったが、本能的にそのことを理解していたのだろう。だから、それほどまでに屈辱的な武器を使っても倒せないという事実は、アリストのプライドをひどく傷つけた。

「ふっふっふっ、ハーハッハッ！」

突然笑い出したアリストを審判は、怪訝けげんそうに見たが、アリストはすぐに笑いを抑えてレオンの方へ向き直る。

（——いいだろう。そうまでして僕の前に立ちふさがるとうなら、思い知らせてやる。この槍を目に焼き付けるがいいさ！）

ギラギラしたアリストの殺気を感じた老従者は、諫めるつもりで口を開いた。

「アリスト様、くれぐれも頭部への攻撃は避けて・・・」

「——黙れ」

殺気だった目でにられ、老従者は言葉を飲み込む。

アリストの準備が整ったと見て、アリスト陣営の審判が旗で主審に合図を送る。

アンガルド
「構え！」

主審が旗を振り上げる。アリストは心臓がバクバクと高鳴っていた。これからアリストは、おそらくレオンの命を奪うことになる。

ジョスト

馬上槍試合では相手が死んだ場合も勝利となる。この割れぬ槍先で頭部を突かれれば、間違えなく首の骨は碎けるだろう。

（罪？ 悪？ 構わないさ。勝利だけが正義なのだから！）

狂気と化したアリストの思考には、勝利の二文字しか見えなくなっていた。

「始めッ！」^{アレ}

主審の旗が振り下ろされる。アリストにはその旗が、レオンの首を切り落とす斬首刀に見えた。

痛い。馬が揺れるたびに響く痛み。俺は必死に痛みを噛み潰しながらアリストを見つめた。

なぜあんな実力があリながら卑怯なマネをするのか。百発百中の突きも、身軽な動きも本当にすごい。確かに、俺とは相性が悪いかもしれないが、最初の打ち合いの時には馬の速度をコントロールすること、^{ファントム・スピア}『幻槍』をかわしてみせた。それなのに、なぜ。

走るたびに左の腕の付け根がズキズキと痛み、意識が朦朧とする。何かを考えようとしても、思考は痛みによって虚しく散り散りに消える。もはや難しいことなど考えられない。次の一撃を当てる。何としても当てる。ただそれだけだ。

^{ファントム・スピア}『幻槍』を使う余裕なんてない。ただ純粹にアリストを思い切り

突いてやる。ただそれだけだ。向かってくるアリストとスピードを合わせる。

不意に思い出す。早朝練習でジーニアス卿が幽霊馬に乗って、相手の騎士役を務めてくれた。ジーニアス卿の槍の腕は本当にすごかった。幽霊であるジーニアス卿が使う槍も、イメージで作り出した幻であつたため、当たることは無かったが、もしあれが本当の槍だったら、全ての攻撃が、狙いたがわず俺の眉間に突き刺さっていただろう。

ぼんやりと思い出すジーニアス卿の姿。遙か彼方の時点から相手の眉間を狙い続ける槍。相手の目を見据えて瞬きさえ忘れたような狩人の瞳。己の体を一本の槍とするような極端な前傾姿勢。そして、近づいた瞬間巨大化するように伸びるジーニアス卿の突き。

俺は無意識に、その動きを再現していた。アリストの一挙手一投足を見逃さぬよう目を見開き、槍の先は常にアリストの眉間に照準し、馬の首に胸をこすり付けるほど、前傾姿勢になる。

近づくアリストの槍は俺の頭を狙っている。

——上等だ！

俺は額ひたいを突き出し、齒を食いしばる。

アリストの姿が見える。いや、表情すら見えるほど近づく。

視認できる距離からすれ違うまでの時間など、本来は刹那の間に消えゆく。しかし、俺にとっては時が止まったかの様に緩慢だった。アリストの槍は俺の頭の揺れに合わせて常に頭部から照準を外さな

い。もとより俺にはよけるつもりなんてない。

ゆっくりと近づくアリストの槍。同時に俺の槍もアリストに迫っている。アリストの槍と俺の槍がすれ違うように相手の顔面に迫る。俺は顎^{あご}を引いて額を突き出し衝撃に備える。そのとき、カチリと体に不思議な感覚が走る。そう、まるで自分の体が一本の槍と化したような。

槍が互いの顔面に触れたのは同時だったのだろうか。俺は視線を一切そらさず、アリストを見ていた。

甲の面当て越しにわずかに見えるアリストの表情。それは歓喜の様に見えた。そして、次の瞬間、驚愕^{きょうがく}に変わった。

次で決勝戦のシーンはおしまいです。

ああ、早く書きたい！

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章第2

いつもありがとうございます！

（ふん、よけないつもりか？ バカな奴めっ！）

アリストは額^{ひたい}を突き出す様にして近づくレオンを侮蔑の表情で見つめる。

（さっきの攻撃を食らってわからないのかっ！ 盾も持たず、額で受けようなんて。頭部に受ければ死ぬことぐらいわかるだろっ！）

アリストの心の中には、レオンを殺してしまうかもしれないことにわずかな恐怖も抱いていたのかもしれない。

しかし、もはやアリストには自分の行為を止めるほどの理性は働いていなかった。自分より強いと思う相手への怒りと憎しみ、そして何より負けることへの恐怖が彼を駆り立てていた。

馬上^{ジョスト}槍の打ち合いですれ違う時間など、刹那にも等しい一瞬だが、このときアリストには、その刹那の時間が無限に引き伸ばされているかのように感じた。

レオンの槍がこちらの顔面を狙っていることはわかった。勝つ気なのだろう。今はポイントが1対0。もし、レオンの攻撃がアリストの顔面を突いて槍先が割れば、アリストの攻撃が相打ちだったとしても、双方にポイントが入り、3対2になる。すると、必然的にレオンの勝利が確定する。

アリストは、どうせレオンの死亡により自分が勝利するのは間違えないが、それでもポイントで負けるのは良い気がしない。

そこで、攻撃までかわした上でレオンを倒そうと決めた。

アリストはレオンの頭部に自分の槍先で狙いを定めつつ、自分は頭部を微妙に動かす。ほんのわずかな動きなのだが、相手が手練であれば手練であるほど、わずかな誤差で攻撃の精度が落ちる。

しかし、レオンの槍はこちらの頭部をピタリと追いつけていた。

（くう、うつとおしい！）

アリストは眉間に何かを突きつけられるような不快感を覚えて歯^は噛み^がする。

無限の様に引き伸ばされていると言っても、時間は止まっている訳ではない。二人の騎士の距離は確実に近づいている。

（終わりだ！）

歡喜の表情を浮かべたアリストは、完璧なタイミングで槍を突き出した。と同時にレオンの攻撃をよけるべく頭部をそらそうとした瞬間、レオンの槍が一気に大きくなったように感じた。顔面に衝撃。

（槍が伸びた！？ バカなッ！）

一瞬目を閉じるアリスト。しかし、その手には同時に手応えも感じていた。馬上槍^{ジョスト}ではありえない重い手応え。割れない槍先ならではものだろう。

「うおおおおおおおおおっ！」

不意に右腕にかかる抵抗が消えた。

（雄叫び？ 誰の？）

グググッと押し込まれるような感覚。目を開く。

「ッ！ バカなああああ！！」

狙いたがわず、俺の槍はアリストの顔面を突いた。一瞬だけ俺の槍の方が速かっただろう。

アリストの槍も俺の頭部を突く。俺はそれを額で受けた。感覚が敏感になっているせいか、その攻撃が顔にめり込んでくるのが、妙にゆっくりと感じた。しかし、俺には関係ない。

「うおおおおおおおおおっ！」

俺はアリストの槍を迎え撃つように額をさらに突き出し体を前傾させる。アリストの槍が俺の圧力に耐えかねたように中心から砕け散る。

——突く！ ただ突く！

俺の槍はアリストの頭部にあたりすでに槍先が砕けていたが構わず突く！

「ッ！
バ力なああああ！！」

アリストが悲鳴を上げる。頭を中心を射抜くように繰り出された槍は、さらにアリストに食い込んでいく。アリストの体は、そのまま俺の槍に押されるようにして馬の背から空中で後方に回転した！

俺はその脇を前傾姿勢のまま駆け抜けた。後方を確認する術はないが、間違ひなくアリストは落馬しているだろうし、俺の勝利は間違ひないだろう。

ワアアアアアアアアアア
アアアア!!

歡聲。

俺は一気に敵陣を駆け抜け抜けると、振り返る。

そこには、安全紐で馬につながれているため、地面を引きずられる青騎士の姿。

ファントム！ ファントム！

聞きなれたファントムコール。

声援に包まれながら、俺は右手に持った槍を突き上げた。

この瞬間、ナイツ・オブ・シヴァリー 騎士大会の花形種目である馬上槍試合の優勝者が決まジョストった。

—の、俺に。

誤字脱字、感想等ございましたら、よろしくお願い致します！

本当は1話のはずのもの2話に分けたので、短めです。

最終試合も書ききって、ホッと一安心。

Knight Be Ambitious

大志を抱いた騎士

第1章 第二

更新遅くなりました！

——ファントム！ ファントム！——

鳴り止まぬファントムコールの中、敵陣からレオンが戻ってくる。戻ってくる途中、レオンは会場の中程で立ち止まり、馬を後ろ足で立たせると観客にアピールした。そこでまたドツと歓声が湧く。棹立ちになった馬はすぐに前足を地面に付けたが、そのときアリストの槍先を踏みつけた。

アリストの改造武器の証拠である槍先は、2度の打ち合いで弱っていたらしく、馬の体重を乗せた蹄ひづめによって簡単に砕かれた。

レオンが戻ってくる。左腕は力なく垂れ下がったままだ。レオンはまっすぐにジーニアス卿のもとにやてきた。

『レオンよ。見事だったぞ』

ジーニアス卿の言葉にレオンは笑顔で頷いた。

『しかし、アレを割ってしまっててよかったのか？』

ジーニアス卿の視線の先にはアリストの槍先の欠片があつた。それを審判に渡せば、アリストの不正は露呈し、騎士として生きてゆけぬばかりか、悪ければ死罪もありえた。

「ジーニアス卿はそれを望んでないでしょう？」

レオンはあくまでも笑みを絶やさず言った。その表情からは、全

てを出し切って勝利したものの爽やかさ、爽快感と言うものが漂っていた。

『……すまん』

アリストはジーニアス卿の子孫ではない。ジーニアス卿の親戚の子孫なのだ。しかし、さかのぼ遡れば同じ血が流れていることも確かであった。

同族の不始末を謝罪するその姿はまさに、部下の責任も自分の責任とするような、長としての謙虚さをレオンに感じさせた。

同時にジーニアス卿がレオンを見つめるその瞳は、空を初めて飛び立ったひな雛を見る親鳥のよう。

『しかし、お主が最後に放った技。どこで覚えてきたのだ？』

「……ジーニアス卿、あなたから教わったんですよ。いつも練習のとき、相手をしてくれていたじゃないですか。その時の突きをマネしたんです」

それを聞いてジーニアス卿は、驚いたように目を見開くと続いて大きな声で笑った。

『レオンよ。お主は予想を上回ることをするな。あの技の名前は、『フェリターブル・ファンデヴ』という』

「『フェリターブル・ファンデヴ』……どういう意味なんですか？』」

レオンの興味深そうに聞く。

『「真の突き」という意味じゃ。己の体を一本の槍とし、相手の体の芯を突き抜く。極端な前傾姿勢と相手の槍を恐れぬ勇気が必要となる』

ジーニアス卿は心の中で、この技を使える者は千人に一人もおるまいと言付け加えた。

「『真の突き』ですか！ カッコイイですね」

レオンは嬉しそうに笑った。だが、ジーニアス卿がレオンより嬉しそうに笑ったことは、レオンしか知らない。

「レオン選手、退場前に貴賓席の方々に挨拶を」

審判に言われ、レオンは慌てて貴賓席の前へ向かう。

貴賓席は、階段状に作られた観客席とは別格で、三階位の高さのところで作られたボックス席である。

レオンは指示された通り礼をする。会場の観客の熱狂は全く収まっておらず、次々に歓声が飛び、レオンを称えた。

本来なら、優勝者と準優勝者で挨拶をするのだが、アリストは気絶してしまっただけで担架で運び出されていた。

一声問官（司会者）がうんたらかんと話を始めたので、レオンは話が終わるまで、左腕の痛みをこらえて待つしかなかった。

ぼうつとしたまま観客席を見ていると、観客席の一番手前の列でひととき大きく手を振っている男がいた。

（・・・門番）

そう、フラウ神殿の門番であつた。彼は必死の形相で手を振っていたが、レオンと視線があつたことに気づくと、パツと表情を輝かせ、自分の隣を大きく指差した。

門番の隣には白いローブとフードを目深にかぶつた人。普通であれば不審者の出で立ちだが、その人の纏う空気はまるでお忍びでやってきた貴人といった様子。

レオンが目を凝らしてジツと見ると、その人はおもむろにフードから顔をのぞかせた。

「——フローラさんっ！」

そう、フードの下から出てきたのは間違いなく、レオンの女神フローラであつた。彼女ははにかんだ笑みを見せてレオンに小さく頭を下げた。

（見に来てくれてたのか・・・）

レオンの胸がじんわりと暖かくなる。レオンはフローラに釘付けで、痛みも忘れてフローラを見ていた。

貴賓席への挨拶を終え、退場するまでレオンはフローラの姿を目に焼き付けたのだった。

いやゝゝ、まさかフローラさんが来てくれるなんてな！ しかも、その試合で勝って優勝なんて、マジでカッコ良すぎる！

俺は治療を受けた後、午後には授賞式があつた。左腕を三角布でつつての授賞式。その間中フローラさんのことを考えてたから、退屈な授賞式もハッピーな時間だったぜ。

ちなみに俺は、優勝賞金と白馬をいただきました！ 優勝賞金は、一年分の給料と同じくらいの額が出ました！ 懐があつたかいと思わず笑顔になるね。

白馬の方は、毛並みもいいし気性も穏やかな感じで乗りやすそう。この3ヶ月沢山馬に乗ったからわかるが、多分かなりいい馬。名馬といっても過言ではないと思う。

授賞式を終えた翌日、俺はフローラさんに会うため神殿に向かった。もちろん白馬でだ。

神殿に着くと、門番氏が笑顔で出迎える。

「レオン様、優勝おめでとうございます！ 昨日の試合は感動いたしました！ その姿はまるで・・・」

興奮してまくし立てる門番氏だが、しばらく夢中でしゃべっていると突然ハツと口を閉ざす。門番氏の視線は俺の背後を見ていた。俺が釣られて振り返ると、そこにいたのは・・・

「フローラさんっ！」

「レオン様、こんにちわ」

にっこりと微笑むフローラさん。その笑顔は天使、いや女神のようだ。いや、女神そのものだ！ めっちゃくちゃ可愛い！ 笑うとちょっとタレ目。ほっぺも可愛い！ それから、髪の間から耳がちょっと見える。そこも可愛い！

「——今日は髪の毛を縛っているんですね」

俺はまずなんて言おうか迷ったが、とりあえずそれが口から出た。そう、今日のフローラさんは、髪の毛を後ろで縛っている。ポニテールとか言うのかな？ 俺はよくわからないが・・・

「髪の毛が伸びてきたのでまとめておいたんです。ヘンですか？」

「ヘンじゃないです。最高に可愛いです」

俺は反射的に言ってしまった。だって本当に可愛いんだもん！ とくにうなじが、白い首筋からうなじにかけてのラインがたまらないとだけ言って置こう！ ちなみに、今日はなぜかジーニアス卿がでてこないです。普段ならジーニアス卿に小言を言われるところだ。もっと気の利いたセリフを言えとかなんとか・・・

俺の即答でフローラさんの顔が一気に真っ赤になる。驚いたんだろうな。なんか俺も急に恥ずかしくなってきた。頬が熱い。

「・・・あの、ここではなんですから、ちょっとお話してきたらいかがですか？ 買い物のお荷物は私が預かりますから」

門番氏は気を使ってくれたらしく、買い物帰りらしきフローラさんから荷物を受け取る。

俺はフローラさんと視線を合わせると、フローラさんはコクリとうなずく。俺は白馬から降りると、轡たすなをひいてフローラさんと歩き出す。

フローラさんを白馬に乗せたかったが、街中でそんなことをしたら目立ちすぎてしまう。あくまで彼女は修道女なのだ。派手なことは慎んだ方がいいだろう。

しばらく歩き、人の少ない路地に入る。すぐそこは大通りだが、ここは人が少ない。

何から話せばいいのか。俺はまず昨日来てくれたことの礼を述べることにした。

「あの、昨日は試合を見に来て下さってありがとうございます」

「え、あ、いえ。友人に勧められて見に行っただんです」

「友人？ あの前番さんですか？」

「いえ、別の。——女性の友人です」

彼女は慌てた様子で言った。俺は何となくホッとしたような気持ちになった。男に誘われたなんてことがあったら、不機嫌になっていたかも。

「そうだったんですね。とにかく、嬉しかったです」

俺は言って微笑んだ。だらしない笑顔になっ
ていないかが心配だった。

それから俺たちは、当たり前障りのない会話を楽しんだ。それはすごく楽しい時間だったが、突然響いた鐘に遮られた。それは正午を告げる鐘だ。

「あつ、そんな時間だったんですね！ 私神殿に戻らないと・・・」

フローラさんは時間の速さに心底驚いた様子で言った。

「ええ、そうですね。・・・馬で送りましょうか？」

俺が冗談めかした口調でいうと、彼女はクスリと笑って言葉を返す。

「いえ、その白馬じゃ目立ち過ぎますから。じゃあ、私行きますね」

フローラさんはペコリと頭を下げて大通りの方へ歩き出す。頭を下げる動作が慌てたような感じですがごく可愛らしく、普段落ち着いているフローラさんが少し幼く見えた。俺の胸に何かが燃え上がる。

「——フローラさん！」

俺はこらえきれず彼女の名を叫んだ。彼女はバツと振り返る。彼女の表情が何か期待している様に見えた。

「あの・・・」

呼び止めたものの、なんて言っただけなのかわからない。彼女は俺の言葉を待っている。

「今度、食事に行きましょう！」

俺のひねり出した言葉に、彼女は複雑な表情で沈黙したあと、

「ええ、必ずっ！」

と笑顔で答えてくれた。俺は嬉しくて胸がいっぱいになった。彼女は今度こそ大通りへ走っていった。薄暗い路地とは違い、大通りは明るい。

光を背に、彼女は大通りにでた後もう一度だけ振り返り小さくお辞儀をして微笑んだ。俺はそんな彼女に手を振った。

——ギイギイギイギイ！！

強烈な摩擦音が聞こえた。彼女の背後に一台の馬車が止まる。馬車から二人の男が飛び出す。一人があつという間にフローラさんを抱えると、馬車の中へ。もう一人が扉を閉める。御者の男が素早く鞭をいれ、馬車が駆け出した。

「なっ！？」

なにが、なにが起きたのか。俺には理解できなかった。誘拐？白昼堂々と？ いや、そんな場合じゃない。奴らを、フローラさんを追わなくては！

俺は白馬に飛び乗り路地から大通りへ飛び出した。

なにがどうなっているのか、全くと言っていいほど何もわからなかったが、その時の俺はただ追いかけることしか考えてはいなかった。

K n i g h t B e A m b i t i o u s

大志を抱いた騎士

第1章第2

誤字脱字のご指摘、感想等お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8995x/>

Knight Be Ambitious ~大志を抱いた騎士~

2011年12月21日01時47分発行